櫛形町文化財調査報告　No.—14

古屋敷遺跡

——広域農道富士川西部地区櫛形６工区内埋蔵文化財発掘調査報告——

附．西畑Ｆ遺跡試掘調査報告

１９９４

櫛形町教育委員会

序　文

古屋敷遺跡は櫛形町の西部に位置する中野地内に所在しています。中野地区を含む町内西半部は、市之瀬台地とよばれる広い丘陵となり、従来から遺跡や遺物などが数多く発見されてきたところでもあります。

この度、この台地の上に県営の広域農道が新設されることとなり、それに先だって埋蔵文化財の保護のため事前の調査を実施することとなりました。

その結果、いまから4500年前の住居址など当時の集落の一部が発見され、そこから水晶製の石器など縄文時代を中心として多くの遺物が出土しました。この台地上は、遺跡や遺物が多数発見されるところでもあり、従来から町内でも古くから人間の足跡が記されたところとして注目されていました。それら従来から知られていた資料と相まって、町民が地域の歴史や文化をひもとき、また次代にむけ、町を発展させようという意識の向上に役立つものと確信しております。

末筆ながら、今回の調査において種々ご指導、ご協力いただきました皆様に心から感謝申し上げる次第です。

平成６年10月

櫛形町教育委員会

教育長　沢　登　孝　弘

目　　次

序　　文

例　　言（凡例）

第Ⅰ章　調査の目的と方法 …… 1

第１節　調査に至る経緯と目的 …… 1

第２節　調査の方法と経過 …… 1

第Ⅱ章　遺跡を巡る環境 …… 2

第１節　自然環境 …… 2

第２節　歴史的環境 …… 4

第Ⅲ章　発見された遺構と遺物 …… 7

第１節　発見された遺構 …… 7

１）竪穴住居址 …… 7

２）土　　壙 …… 9

３）溝状遺構 …… 9

４）ピット群 …… 10

第２節　出土遺物 …… 22

第Ⅳ章　調査の成果と課題 …… 25

第Ⅴ章　西畑Ｆ遺跡の調査 …… 26

引用・参考文献 …… 27

報 告 書 抄 録

挿図目次

第１図　遺跡周辺地形図［1/4000］…… 3
第２図　遺跡位置図及び周辺遺跡分布図［1/25000］ 5
第３図　古屋敷遺跡全体図［1/360］ …… 6
第４図　１号・２号住居址［1/80］…… 8
第５図　１号～４号土壙［1/30］…… 11
第６図　５号～８号土壙［1/30］…… 12
第７図　９号～14号土壙［1/30］…… 13
第８図　15号～19号・40号土壙［1/30］…… 14
第９図　20号～23号土壙［1/30］…… 15
第10図　24号～29号土壙［1/30］…… 16
第11図　30号～33号土壙［1/30］…… 17
第12図　34号～39号土壙［1/30］…… 18
第13図　１号～５号溝状遺構［1/180］ …… 20
第14図　ピット群［Ⅰ区～Ⅲ区］[1/300] …… 21
第15図　出土土器 (1) [1/3] …… 23
第16図　出土土器 (2) [1/3] …… 24
第17図　出土石器［1～5－1/1, 6～9－1/2］…… 25
第18図　西畑Ｆ遺跡試掘グリット配置図
　　及び土層断面概念図［1/600, 1/60］ …… 27

表　目　次

第１表　住居址柱穴規模 …… 7
第２表　土壙一覧表 …… 19
第３表　ピット規模（ピット群）…… 22

図版目次

古屋敷遺跡遠景 …… 図版1
Ⅱ区（１号溝状遺構・土壙群)…… 図版1
Ⅱ区土壙群（１～４号・６号・12号・18号・
　　24号・40号土壙 …… 図版1
１号住居址 …… 図版2
２号住居址 …… 図版2
Ⅲ区土壙群 …… 図版2

例　言

１．本書は、平成５年度に実施した広域農道富士川西部地区櫛形６工区内遺跡の調査報告書である。
２．遺跡は、山梨県中巨摩郡櫛形町中野及び上野に所在する。
３．調査を実施した年月日は以下の通りである。
　現地調査　　平成５年８月６日～同年10月24日
　整理作業　　平成６年４月～同年10月まで断続的に行った。
４．調査組織は以下の通りである。
　調査主体　　櫛形町教育委員会
　調査担当　　清水　博（櫛形町教育委員会）
５．発掘調査参加者　　相川はるみ、　相川みさえ、　饗場うさ乃、　入倉とら江、　入倉　妙子、　川崎しげみ
　　桜田　和子、　桜田　定子、　桜田みさえ、　桜田みさ子、　長沼　豊子、　神田林太郎
　　永田　昌弘、　アレックス・イエム、　　月村　　登、　由井　伴三
　整理作業参加者　　甘利千恵子、石川　千年、神田久美子、土生都敏江、田辺　ミヨ、古郡フミ子、若林　初美
６．本報告書作成の業務分担は下記の通りである。
　第Ⅰ章～第Ⅴ章－清水、遺物の実測・トレース－若林
７．現地調査及び本書作成にあたり下記の方々から、ご指導・ご助言をいただいた。記して謝意を表する次第である。
　小野正文・保坂康夫（山梨県教育委員会学術文化課)、櫛原功一（帝京大学山梨文化財研究所）

凡　例

１．本書の遺構・遺物の挿図の指示は次の通りである。
(1)　挿図縮尺は原則として次の通りである。
　遺構全体図－1/360　竪穴住居址－1/80　土壙－1/30　溝状遺構－1/180　ピット群－1/300　土器実測図－⅓
　石器－1/1、1/2　試掘グリット配置・同断面概念図－1/600, 1/60
(2)　遺構図の記述・挿図について。
　遺構実測図の水系レベルは海抜高を示す。
　主軸方位は長軸と真北とのなす角度で示す。
　規模は相対する壁の最長距離である。
　焼土はスクリーントーンで示す。
(3)　遺物の記述・挿図について。
　土器実測図のスクリーントーン、△－△は釉範囲、断面のスクリーントーンは陶器類を示す。

第Ⅰ章　調査の目的と方法

第１節　調査に至る経緯と経過

近年の社会の高度化に伴い、第１次産業である農業も衰退の傾向にある。また、国際化社会の到来とともに農産物にも輸入自由化の波が押しよせ、危機の時代を迎えている。

山梨県は、そういった時代に対応し農業の近代化と再編をはかるため様々な施策を講じてきた。その一環として農業基盤の整備を目的として、県内をほぼ一巡する広域営農団地農道整備事業を進めているが、平成５年度においては、櫛形町南半部を主な対象地とする富士川西部地区櫛形６工区の建設を計画していた。この広域農道路線は、埋蔵文化財包蔵地の密集している市之瀬台地上を走るもので、過去の事業においても遺跡の調査[1)]を実施してきたところであった。平成５年度事業予定の櫛形６工区にあたる中野地区の平坦面にも、縄文時代を中心とする良好な遺跡の存在が知られていた。予定路線は、中野古屋敷遺跡・東久保遺跡の端部を縦断し、上野地区においても西畑Ｆ遺跡を貫いて設定されていた。特に古屋敷遺跡は東に隣接するかに原遺跡と共に、非常に多数の縄文時代遺物が採集されており、市之瀬台地上でも有数の遺跡として認識されていた。工事主体者である峡中土地改良事務所では、該地における埋蔵文化財の取扱いについて櫛形町教育委員会に問合せを行った。教育委員会では、それを受け、山梨県教育委員会学術文化課の指導のもと、峡中土地改良事務所に対して古屋敷遺跡については発掘調査が、西畑Ｆ遺跡については試掘調査が必要な旨回答を行った。その後関係三者で埋蔵文化財の保護に向け協議を行ない、予定路線内における遺跡については、事業実施に先だって、発掘調査を行ない記録を保存すること、また本来県営事業に伴う発掘調査については、県埋蔵文化財センターが実施してきたところであるが、今回は諸般の事情もあり、櫛形町教育委員会が実施することとした。更に整理作業については、櫛形町教育委員会が同年度内にその他にも多くの発掘調査等を実施することになっていたため、峡中土地改良事務所の理解を得て、平成６年度に実施することとした。

第２節　調査の方法と経過

調査は、平成５年８月６日に開始した。調査区内には、既設農道が蛇行して走り、耕作などのため地元住民が頻繁に利用していた。そのため農道外をまず調査し、その部分を埋め戻した後に農道下を掘削することとした。調査区は、巾14ｍで延長は160ｍ程に達した。調査区は蛇行する既設農道によって分断されていたため、北側からⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区と区分して呼称した。（第３図）

調査方法はグリッド法を採る事とした。コンピューターによる遺跡調査システムを採用したため、調査区全体に６ｍ方眼の仮想グリッドを設定した。グリッドは、櫛形町中野及び平岡に所在する三等三角点を用い国家座標第Ⅷ系に従い、そのため磁北に対して5°50”西偏している。東－西方向に西から０～４、南－北方向に北からＡ～Ｚと定め、例えば０～Ａ区、Ｚ～４区と呼称した。

発掘にあたっては耕作土を重機で排土し、以下の層を人力によって遺構確認を行いつつ掘り下げた。排土は中央部にあたるⅡ区から実施し、順次Ⅰ区、Ⅲ区と移行した。遺物の取上げ、遺構の図化には、コンピューター・システム㈱製のプログラム「ＳＩＴＥ」を使用し、光波測量器、コンピューターを利用し、迅速かつ正確を図った。

Ⅱ区では、厚さ50㎝程の耕作土下にローム混りの暗茶褐色土層が堆積していた。しかし遺構の遺存状態からみて、ある時期において遺構の上部を削平した後再度堆積したものである可能性が強い。またⅠ・Ⅲ区では、20～

30mの耕作土を除去するとハードローム面に達してしまった。このローム面もかなり削平されていると思われ、遺構の遺存状態は極めて悪い。しかし逆に遺構の確認について言えば、ローム面上でほとんどの遺構を確認することとなったため、作業効率は比較的スムーズであった。

この遺跡は遺構上部の攪乱（削平）が著しく、Ⅱ・Ⅲ区についていえば、遺構の低部が既設農道面よりも高い状態で、農道開設時において遺構が全て削平されていた。そのため農道下の発掘調査については、当初の予定と違い実施しなかった。

古屋敷遺跡の調査は平成５年10月８日に終了した。西畑Ｆ遺跡は同年10月12日～同月15日まで実施した。計11箇所の試掘グリッドを設定したが、耕作土直下が洪積世扇状地の堆積による礫層となっており、遺構・遺物とも発見することはできなかった。

全体の調査は、10月24日に完了したが10月15日には、山梨県学術文化課の現地確認を得ている。

第Ⅱ章　遺跡を巡る環境

第１節　自然環境

遺跡は山梨県中巨摩郡櫛形町中野字古屋敷他に所在している。櫛形町は山梨県の西部中央に位置し、山梨県元標（山梨県庁）からは約14kmの距離を隔てている。甲府盆地の西には、南アルプス連峰と呼ばれる赤石山脈がそびえ、その前方には、やや高度の低い巨摩山地が連なっている。巨摩山地の中央には、櫛形山と呼ばれる大きく櫛の形をとった山魂がそびえているが、櫛形町はその山裾に発達した町で町名も櫛形山に由来している。

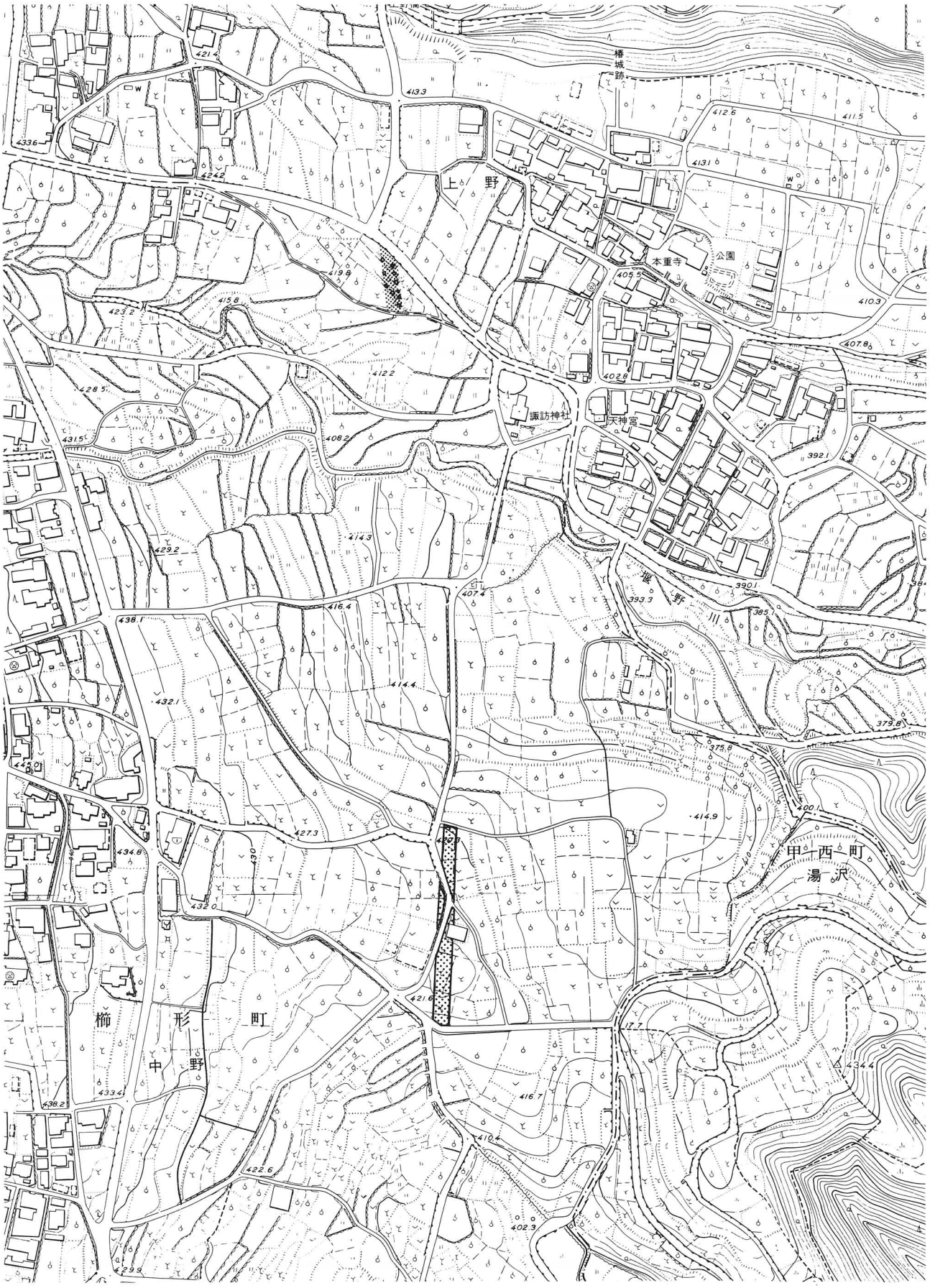
櫛形町は地誌的に大きく三区分され、それぞれ極めて対照的な特徴を示している。櫛形町の西縁は櫛形山の稜線によって他町村と画され、その頂上は東洋一を誇るアヤメの群落が咲きほこっている。櫛形山を首座とする巨摩山地や、その背後に連なる赤石山脈は糸魚川－静岡構造線の一部をなしているが、そのため櫛形山にも幾条かの断層崖地形が刻まれている。櫛形山の中腹に南北に連なる高尾・立沼・伊奈ケ湖等の平坦面や沼地は伊奈ケ湖断層によって生じた窪地を成因とするものである。櫛形山麓は上市之瀬断層による傾斜変更線によって市之瀬台地へと続いている。

櫛形山の東麓に広がる市之瀬台地は、上市之瀬断層前面に発達した更新世の扇状地が甲府盆地形成に与った地殻変動によって形成された丘陵状の地形で、南北４km、東西２．５kmにわたって扇形に広がっている。標高は400～500mを測り、台地前面は比高差100～120mを測る下市之瀬断層崖を経て盆地床へ至る。また台地先端は、断層運動によって生じた小円頂丘が並び、これらの西側は緩やかな逆傾斜面を経て西方山麓へ順次高まっていく。台地基盤は櫛形山層で、その上部を櫛形山魂から流れ出た古い扇状地堆積物が覆っている。この礫層は上野山礫層と呼ばれ、砂質の部分、粘土質の部分などを含み、全体に酸化が進み、いわゆる「くされ礫」状を呈している。

その上部は火山性堆積物によって覆われ、上部から伝嗣院ローム層、黄白色軽石層、上野山ローム層となり、上野山礫層へと続く。上野山礫層中には古期ロームが挟在している。伝嗣院ロームは新期信州ロームに、上野山ロームは中期信州ロームに相当し、黄白色軽石層は木曽古御岳の第一浮石層（Pm－1）で甲府盆地における鍵層となっている。また古期ロームは古信州ロームに相当するものと言われている。

この市之瀬台地上面には、北から高室川、深沢川、添川、市之瀬川、秋山川などが流れ、幼年期の侵蝕地形を呈している。このため大きく扇形をなす市之瀬台地は、北から田頭、平岡、上野、中野と、それぞれ河川を隔てた小台地に区切られている。

櫛形山を水源とするこれらの諸河川は、山腹では18°～22°という急激な勾配をもって流れ落ち盆地床に至ると谷の出口に扇状地を造る。これらの小扇状地は御勅使川の形成する大扇状地と相まって複雑な「複合扇状地」を



第Ⅰ図　遺跡周辺地形図〔1/ 4000〕

造るが、櫛形町の中心部小笠原はこの扇状地上に発達した市街地である。この地域は古来から「原七郷」と呼ばれて「原七郷は月夜でも焼ける」と言われるほど極めて水に乏しい乾燥地で、豪雨時には洪水におそわれる地域であった。地下に滲みこんだ水は扇端部では再び湧き出して湧水列をつくるが、この湧水列から低位は水の豊富な水田地帯となり、古来「田方」と呼ばれてきた。一方先に述べた扇状地は「原方」と呼ばれ、桑畑や果樹園に利用され、台地から扇頂部にかけては「根方」とよばれ、山の根にあって谷川の水を利用した水田や台地上の畑に依ってきた。

今回調査を行った古屋敷は市之瀬台地の南半、ほぼ中央に位置している。櫛形山南方にはり出している中野城山山裾の傾斜変更線から順次下り、更に傾斜をゆるめていく地点にあたる。微地形的には北に堰野川、南に秋山川にはさまれた小尾根状で、東に向けて開らけたテラス面となる地点に位置している。今回の調査区の西東方は共にゆるやかなテラス面となり、縄文時代を中心とした多くの遺物が採集される地域である。

第2節　歴史的環境

平成元年度に実施した遺跡詳細分布調査[2)]などによれば、櫛形町内には244ヶ所におよぶ埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が確認されている。

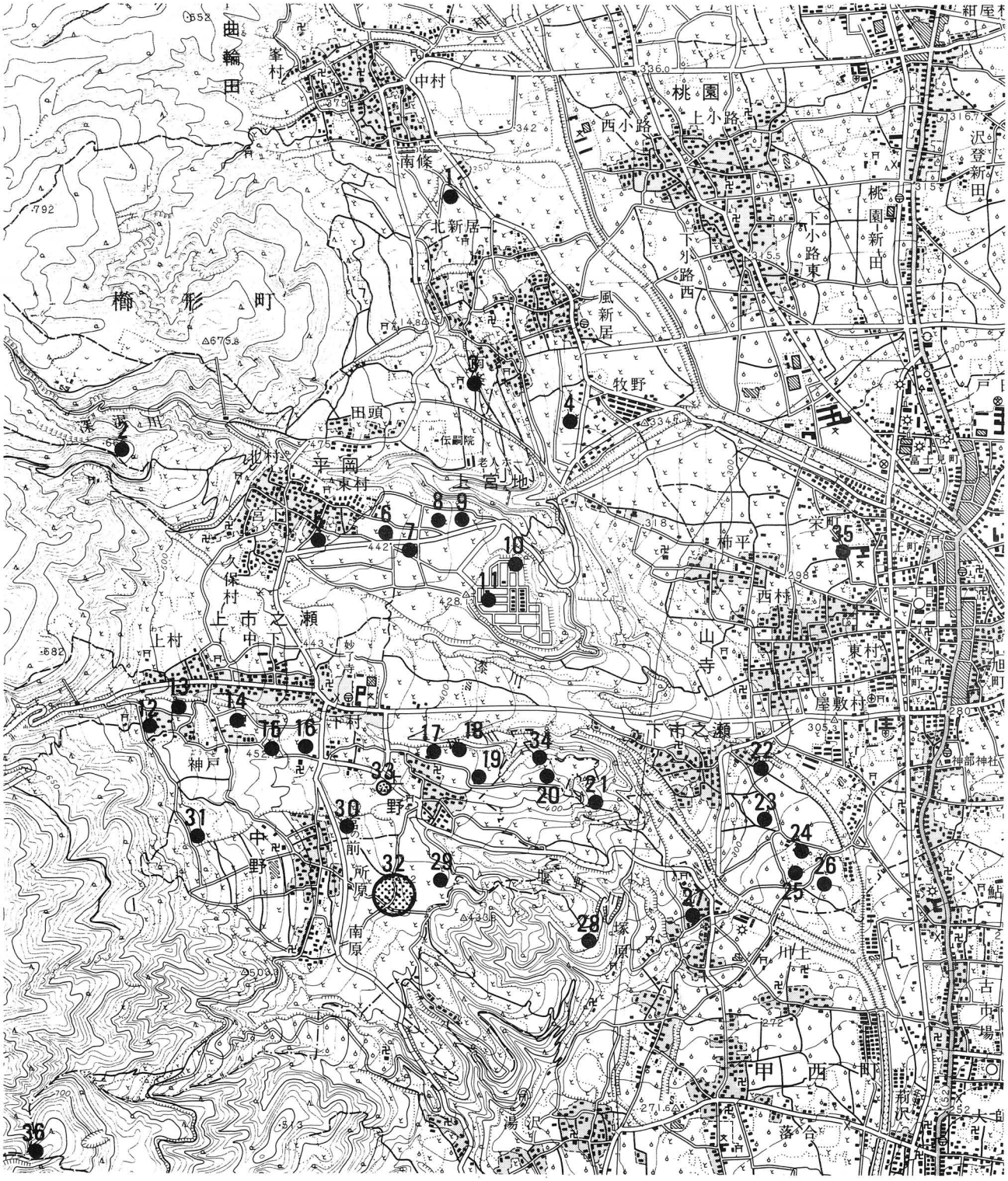
櫛形町内は地誌的に大きく山地、台地、扇状地と三つに区分されることは、前節で述べた通りである。遺跡はこのうち、主に町内中央部の台地上、同東半部の扇状地上に存在しているが、櫛形山中にも縄文時代を中心とする遺跡が確認されており、今後の調査が期待されている。また扇状地上についても、甲西バイパス等の調査によって厚い扇状地堆積物の下部から多くの遺跡が確認され新しい知見がもたらされている[3)]。

町内において最も古い考古学的遺産は、旧石器時代のものである。平岡の台地上からは18000年前にさかのぼる石器類（旧石器）が数ヶ所から発見されている。町内に於ける遺跡分布の概略は、台地上では縄文時代から弥生時代までの遺跡が主体となり、台地縁には前期古墳が築造されている。扇状地上では弥生時代後半から中世までの遺跡が主要なものである。その後中世から江戸時代には、町内各地域に遺跡は拡散し、現在の各集落のもととなっている。

市之瀬台地上には、縄文時代、弥生時代を中心とした数多くの遺跡が存在している。先に述べた旧石器時代の遺物は、この広域農道開設に伴って調査された遺跡（長田口遺跡⑥）からも出土している。長田口遺跡を中心として平岡の台地中央に並んでいる長田Ａ遺跡⑦、東原Ａ遺跡⑧、同Ｂ遺跡⑨などは縄文時代中期を中心とする遺跡で上野・中野の台地に移っても上の山遺跡⑱[4)]、古屋敷遺跡㉜、かに原遺跡㉙などは、同時期の県内でも有数の遺跡とされているものである。長田口遺跡や上の山遺跡は、台地先端の六科丘遺跡⑪[5)]、同縁辺の上野東遺跡[6)]などと共に弥生期後半～終末にかけての集落遺跡でもある。古墳時代になると主要な集落は台地下の、曽根遺跡[7)]④や甲西バイパス路線内の遺跡へ移行するが、市之瀬台地上には物見塚古墳㉑[8)]、六科丘古墳⑩[9)]、上野東古墳[10)]⑳などが築造され、この台地から見下ろす櫛形、甲西地域にも強大な首長が成長していたことをうかがわせている。また台地直下の扇状地には、塚原という字名が示す様に後期群集墳が営まれ、狐塚古墳㉒、上村古墳[11)]㉗などが残っている。

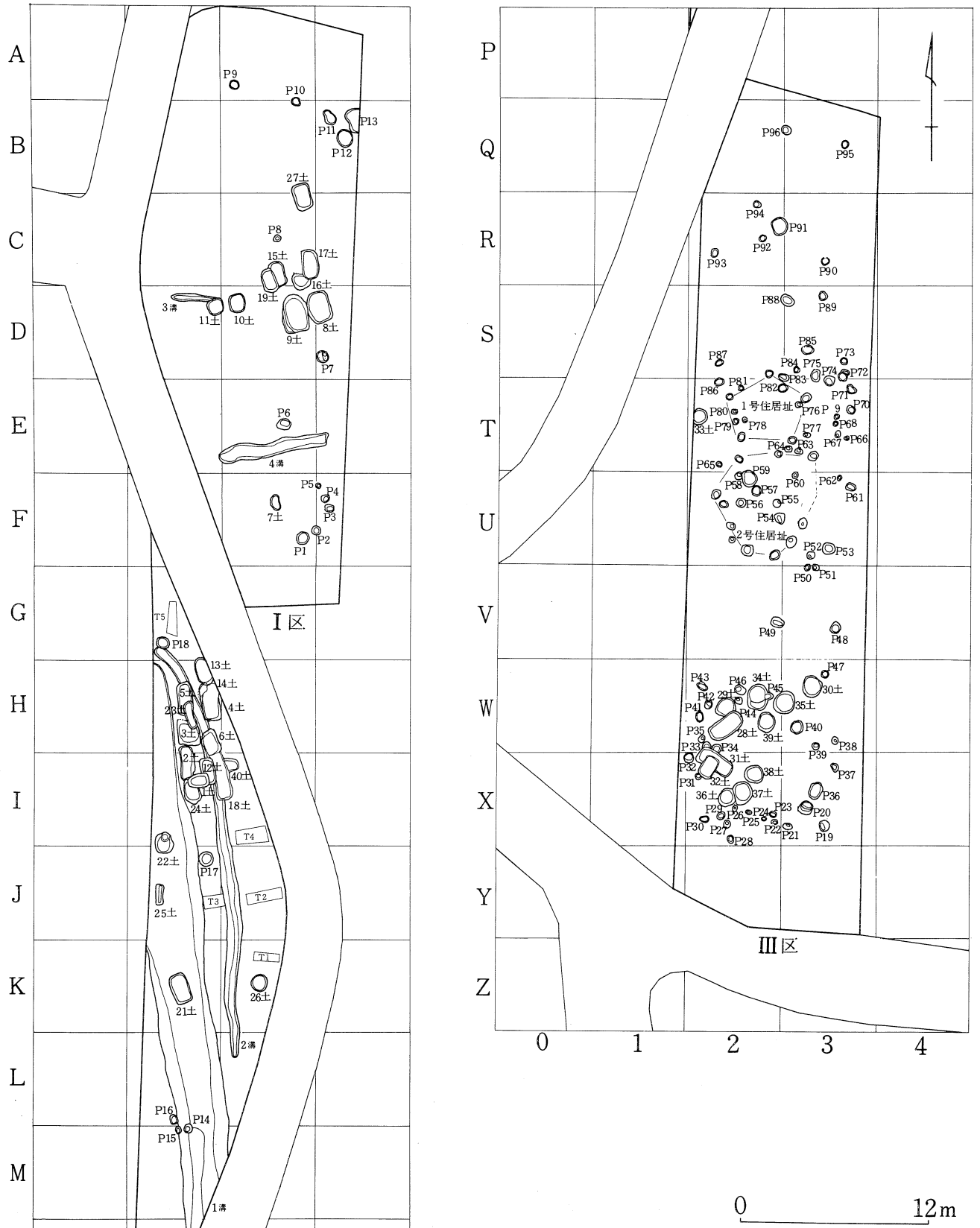
櫛形町小笠原は、甲斐源氏の雄族「小笠原氏」が拠点としていた所であり、現小笠原小学校は小笠原氏館跡[12)]㉟と伝えられている。その他にも上野の椿城⑰、中野の雨鳴城㊱など中世から戦国時代にかけて、多くの城館が営まれた地域である。

以上の様に、この市之瀬台地上は特に縄文時代から弥生時代の遺跡群が存在する地域としては県内でも有数の箇所であり、その意味でも今回の調査に期待されること大であった。



1．北峰遺跡　2．笹砦　3．御崎古墳　4．曽根遺跡　5．中畑遺跡
6．長田口遺跡　7．長田A遺跡　8．東原A遺跡　9．東原B遺跡　10．六科丘古墳
11．六科丘遺跡　12．上杉本A遺跡　13．上杉本B遺跡　14．下杉本A遺跡　15．下杉本C遺跡
16．山道添D遺跡　17．椿城(上野城)　18．上の山遺跡　19．上野遺跡　20．上野東遺跡
21．物見塚古墳　22．狐塚古墳　23．鋳物屋古墳　24．川上道下遺跡　25．鋳物師屋遺跡
26．メ木遺跡　27．上村遺跡　28．昼喰場遺跡　29．かに原遺跡　30．東田遺跡
31．中河原遺跡　32．古屋敷遺跡　33．西畑E遺跡　34．上野東古墳　35．小笠原氏館跡
36．雨鳴城

第2図　遺跡位置図及び周辺主要遺跡分布図〔1/25,000〕



第3図　遺跡全体図〔1/360〕

第Ⅲ章　発見された遺構と遺物

第１節　発見された遺構

１）竪穴住居址

１号住居址（第４図、第１表、図版１）

Ｔ－２・３区に存在する。遺構上面の削平が激しく、柱穴及び炉跡のみ発見された。ピット群の中央に存在するため、当初はその一部と考えていた。しかし炉跡を中心として規則的に配置された柱穴を確認したため、住居と認定した。柱穴は五角形を呈し、南辺にあたるP_4～P_3間がやや広く配置される。一辺は2.6～3.0ｍを測り、住居跡自体は径5.5～6.5ｍ程と推定される。主軸方位は、ほぼ真北にとるものであろう。炉は、地床炉で径110～120㎝を測り、焼土は薄く遺存している。P_2東脇には、焼土ブロックが存在していた。

遺物は縄文中期後葉（曽利期）のものが、わずかに散乱する程度であったが、細分化していたため図示するには至らなかった。

２号住居址（第４図、第１表、図版１）

Ｔ・Ｕ－２・３区に存在し、１号住居址に南燐して営なまれる。上面の削平が著しく、炉・柱穴しか確認されなかった。また南東部にあたる柱穴の一部は確認できなかった。柱穴の位置関係などから、１号住居址との同時存在は難しいと考えられる。

P_3. P_4. P_6. P_8～P_{11}が柱穴と考えられ、これも五角形ないし、六角形に配置されている。柱穴間は２～３ｍの間隔を保つ。P_3とP_{11}との間に１～２箇所の柱穴があると想定されるが、特に深くまで耕作が及んでいた箇所で確認できなかった。P_1. P_2及びP_5～P_7は、出入口施設に関係するものとも考えられる。炉は２箇所ほぼ東西に接して検出された。１号炉は、径90㎝、２号炉は、30～40㎝を測り、共に地床炉である。

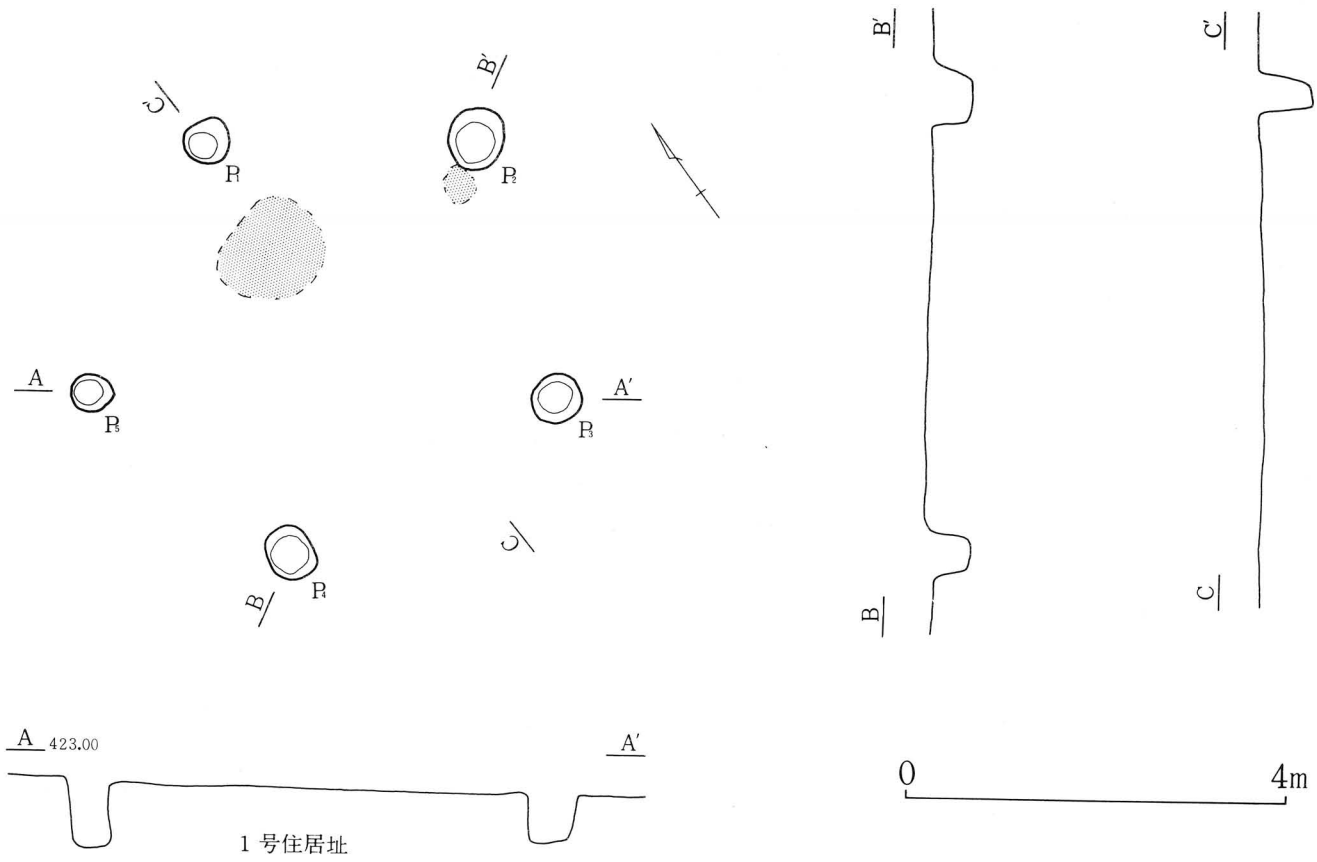
推定される住居跡の規模が８～９ｍに達すること、炉が２基確認されていること、柱穴の数と配置など、更には遺物も曽利Ⅱ期のものと曽利Ⅳ期のものが出土していることから２軒の住居が重複したものか、あるいは建て直しがなされたものである可能性が強い。

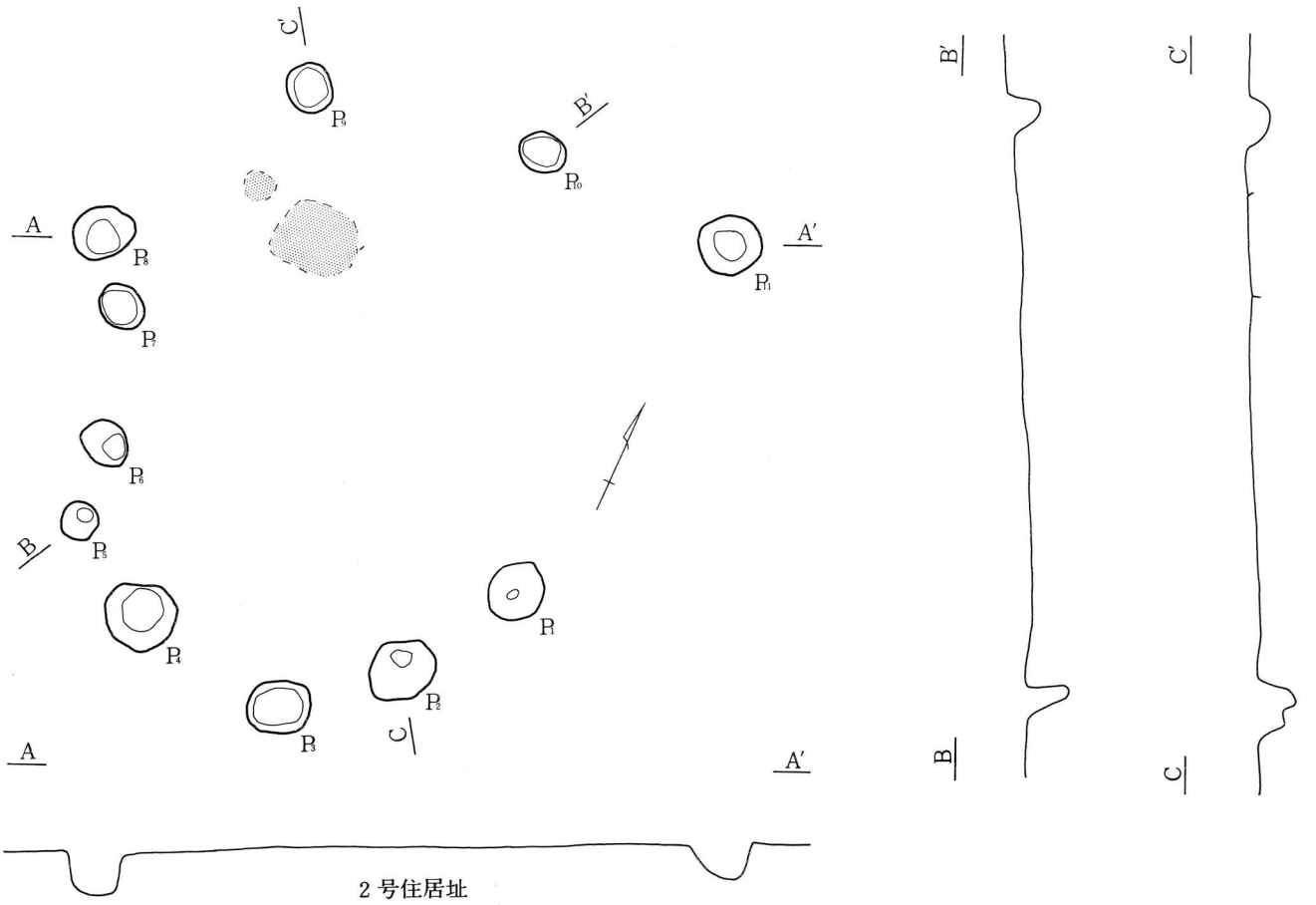
今回の調査区は、Ｖ・Ｗ区でやや傾斜を強めて谷部へ続いており、１・２号住居址とも平坦面の縁辺部に位置している。

第１表　住居址柱穴規模

長×短　深（㎝）

１号住居址	P_1－52×50 60	P_2－68×60 42	P_3－56×54 50	P_4－60×50 40	P_5－48×40 70
２号住居址	P_1－70×58 39	P_2－76×62 40	P_3－68×56 15	P_4－76×72 27	P_5－41×40 42
	P_6－56×42 27	P_7－52×42 20	P_8－70×56 42	P_9－56×44 22	P_{10}－50×42 36
	P_{11}－70×62 40				





第 4 図　1 号、2 号住居址〔1/80〕

２）土壙（第５～12図、第３表、図版２）

総計40基の土壙が検出された。平面形は、方形、長方形、不整長方形、楕円形、円形を呈するものが認められる。しかし遺構上部の削平、攪乱が激しいことを考えると、基本的には、長方形（不整長方形）のものと円形のものとの二種に大別しうる。断面形は深鉢形、浅鉢形等と分類したが、これも平面（不整）長方形のものについては、深鉢形としてよいと思われる。壙底は平坦で、急激に直線的に立ち上がる壁を有するものであろう。また数例を除いて、ほとんど数ヶ所に密集し、切り合って掘り込まれている。第１群はＣ・Ｄ－３・４区に密集して存在している。耕作による可能性が高い７・10・11号土壙を除くと、全て長方形を基調とし、主軸方位はほぼ同一にとっている。15～19号土壙は深さ26cmと比較的浅いが、これは上部をかなり削平されているためと思われる。17・27号土壙からは縄文時代中期後葉（曽利期）の土器片が出土している。第２群はＨ・Ｉ－２区に密集しており、ほとんどが互いに切り合って掘り込まれる。３号土壙を除く全てが長方形を基調としている。主軸方位もほぼ同一にとり、１・40号土壙はそれらと直交している。方形に近い３号土壙も南北方向がやや長い。また長軸を極端に長くとる18号土壙は、底面にわずかに段部をのこし、横巾及び長軸を全く同一にとる二つの土壙が重複したものである可能性が高い。３・４・15号土壙から縄文時代中期後葉の土器片が出土している。第３群はＷ・Ｘ－２・３区に集中している。円形を呈するものが主体となり、長方形を呈するものも他の群とは主軸を斜行させている。また周囲にピット群をともなっている。このＷ・Ｘ区は、台地縁辺傾斜面にかかった位置にあり、占地上からも他の群とはやや趣を異としている。28・32号土壙からは、縄文時代中期後葉の土器片がまとまって出土している。更に住居址の西に単独で存在する33号土壙からも同時期の良好な資料が出土している。

なお２号溝と切合関係にある全ての土壙は、同溝によって切られている。また、この土壙群からやや離れて、21・22・25号の三つの土壙が１号溝内に掘り込まれている。これらの土壙は全て上部に粘土混りのローム主体層が固く覆っていた。これは１号溝掘り込み時に貼り付けられたものであろう。

３）溝状遺構（第13図、図版２）

１号溝状遺構

Ｎ－２・３区からＨ－２区まで、ほぼ南北に走っている。Ｎ２区では溝低部は道路面よりも更に高く、道路付設時に完全に切られてしまったものであろう。また道路反対側のＰ－２区では、この溝は全く確認できず、ほぼこの道路内で完結していた可能性が強い。また１号溝状遺構に南接して東西に走る５号溝状遺構との関係も既設道路によって完全に削平されたため、明らかにしえなかった。

溝北端は、Ｈ－２区で調査区外へと逃げているが、溝東壁は、この部分で90°に掘曲していることが確認でき、更に１号溝状遺構と平行して走る２号溝状遺構の状況からも、この部分で90°に折れていると考えられる。

溝の巾は3.5～5m、深さは20～40cmを測る。覆土は５層確認され、２～５層はロームブロックを多量に含む遺構の最下層によくみられる層である。今回の調査区は、全体的に遺構の上半部がかなり削平を受けている可能性が高く、覆土の状況などからこの溝も、その基底部のみが違ったものと考えられる。

溝の低部は平坦で、固く締められていた。この溝内に存在する21・22・25号土壙の上部を完全に覆う様に粘土混りのローム主体層が固く貼り付けられていた。これら土壙との時期差を考えるうえでも、またこの溝の性格を考えるうえでも非常に興味深い。壁はわずかしか違っていないが、東壁は急激に、西壁はやや緩やかに立ち上がっている。先に観察した様にＨ－２区で90°に折れているものとすれば、溝外壁は急激に、内壁は緩やかに立ち上がっているとも考えられる。

尚、P_{14}～P_{18}までは、この溝に付属する可能性が高い。

２号溝状遺構

Ｌ－３区からＧ－２区まで南北にゆるく弧を描きながら走っている。１号溝状遺構とほぼ平行しており、同時

期にセットとして掘り込まれたものと考えられる。

巾は60～120cm、深さは25m程を残す。断面形は洗面器状を呈し、底面はフラットである。底面は部分的に固く締まった部分もあるが、南半部は非常に軟弱であった。覆土は２層に分けられ、１号溝状遺構のものと非常に似かよっている。

３号溝状遺構

Ｄ－２区で東西に走っている。長さ2.5m、巾40cm、深さ10～15cm程を測る。

４号溝状遺構

Ｅ－２区からＥ－４区までほぼ東西に走っている。長さ７m、巾0.8～１m、深さ30cm程を測る。

３・４号溝状遺構共に覆土は、ロームブロックが混入した非常にしまりのない土である。また共に現在の畑境の線とほぼ一直線に連なっており、耕作に由来するものである可能性が高い。尚、３号溝状遺構覆土からは、縄文時代中期の土器片が出土しているが、覆土等の状況から後世の混入と考えたい。

５号溝状遺構

Ｏ－２区からＮ－２区まで南西－北東方向に走っている。西端部は調査区外へ逃げ、東半部は既設道路によって完全に切られている。巾は１～1.4m、深さ35cm程を測り低部は緩やかに湾曲している。覆土は２層に分けられた。

当初、５号溝状遺構と１号溝状遺構とは同一の溝とも考えたが、規模、低部の様相など相違点が多く、別個のものと判断した。しかしその関係については、切り合い部が失なわれているため明確にすることはできなかった。

４）ピット群（第14図、第３表）

総計96個のピットが検出された。概略５ヶ所程のグループに分けられる。形状、規模は第３表の通りであるが何度も述べる様に、この遺跡は削平が激しく本来の遺構の基底部しか違っていない。

第１のグループは、調査区北端Ａ－３区からＢ－４区にほぼ直線上に並んでいる。このうちP_{12}、P_{13}については、後世（耕作時）の攪乱の可能性が高い。

第２のグループは、Ⅰ区南端、Ｆ－３・４区に孤状に並んでいる。

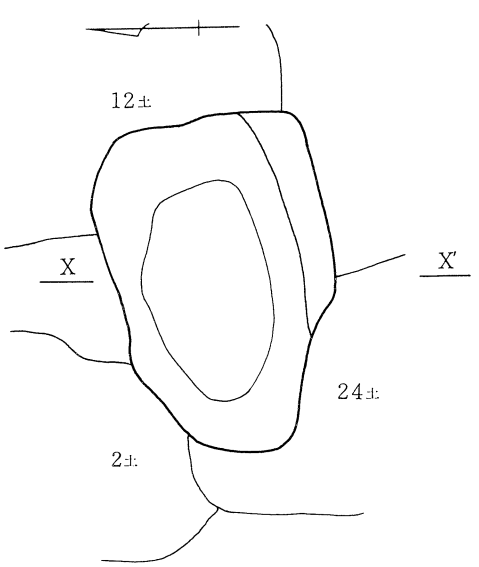
第３のグループは、Ⅲ区北端、Ｑ－２・３区～Ｓ－３区にかけて散在している。

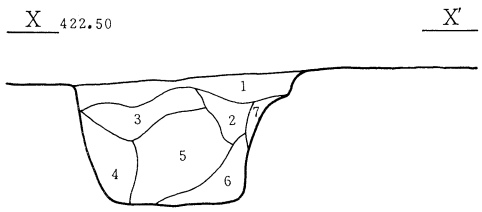
第４のグループは、Ｓ－２・３区からＵ－２・３区にかけて集中しており、縄文期の住居址周囲に認められるものである。

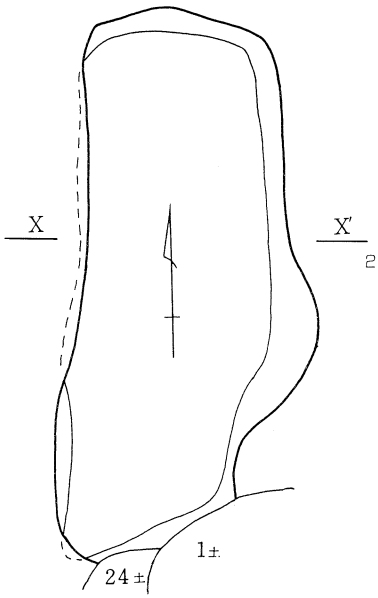
第３・４グループのピットについては、住居址柱穴の可能性も含め精査を行なったが、床面、炉址、ピット配列の規則性など、１・２号以外の住居址を明確にすることはできなかった。

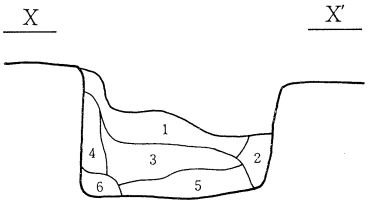
第５のグループは、発掘区南端部のＷ－２・３区～Ｘ－２・３区に位置する。調査区はＶ・Ｗ区で傾斜を強めて谷部へ続いており、このグループは傾斜面にかかった部分に位置するものといえる。11基の土壙を中心としてそれらをとりまく様に掘り込まれている。

P_4、P_{25}、P_{28}、P_{35}では、縄文時代中期後葉（曽利期）の土器が覆土から出土している。上面の攪乱が激しかったⅠ区のP4以外は、その時期を示すものといえよう。従って、Ⅲ区から検出されたピットについては、縄文時代中期後葉の所産と考えたい。



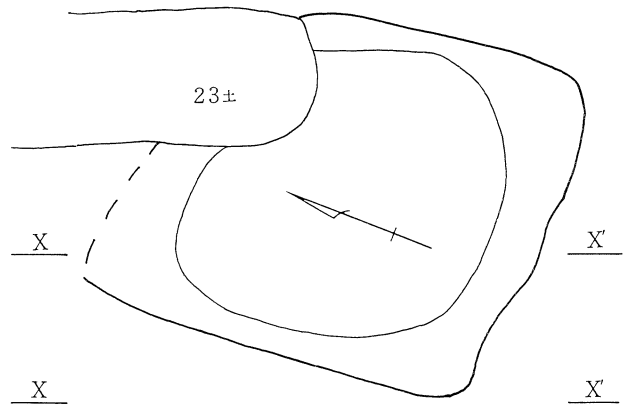


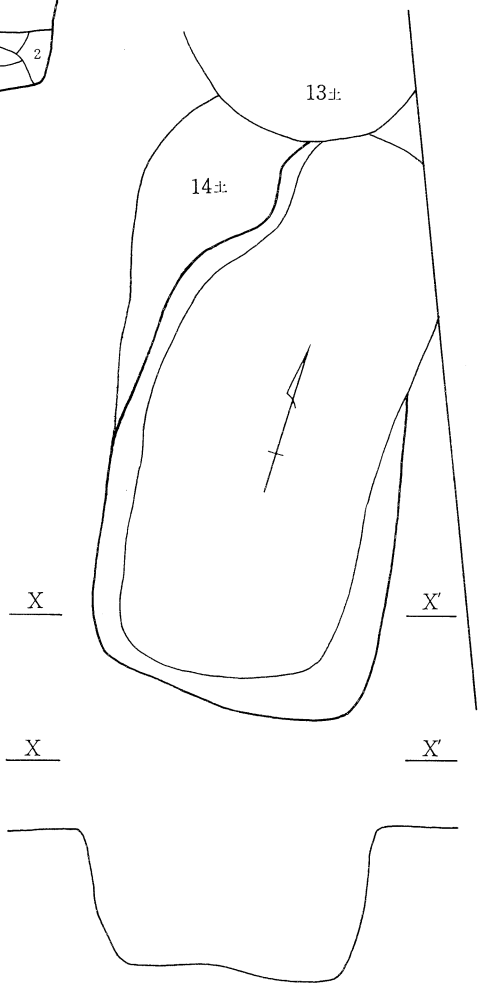




2号土壙
第1層：暗黄茶褐色土層（粘性弱、しまり無、粒子普、ロームブロック・ローム粒・茶褐色土を含む）
第2層：暗黄茶褐色土層（粘性弱、しまり無、粒子普、ロームブロック・ローム粒・茶褐色土を少量含む）
第3層：暗黄褐色土層（粘性やや強、しまりやや有、粒子やや密、ロームブロックを含み、茶褐色土を少量含む）
第4層：暗黄茶褐色土層（粘性弱、しまり無、粒子普、ローム粒を多量、ロームブロック・茶褐色土粒を少量含む）
第5層：暗黄褐色土層（ロームブロック主体層、粘性やや強、しまりやや有、粒子やや密）
第6層：暗黄褐色土層（粘性やや弱、しまり無、粒子やや粗、ローム粒を多量、茶褐色土を少量含む）

1号土壙
第1層：暗黄茶褐色土層（粘性普、しまりやや有、粒子やや密、茶褐色土を多量、ロームブロックを少量含む）
第2層：暗黄茶褐色土層（粘性やや弱、しまり無、粒子やや粗、ローム粒を少量含む）
第3層：暗黄茶褐色土層（粘性やや弱、しまり無、粒子やや粗、ロームブロックを多量、ローム粒を含む）
第4層：暗黄褐色土層（粘性やや強、しまり普、粒子やや密、ロームブロック・ローム粒を含む）
第5層：暗黄褐色土層（粘性普、しまり普、粒子普、茶褐色土・ロームブロック・ローム粒を含む）
第6層：暗黄褐色土層（粘性やや強、しまり普、粒子やや密、ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む）
第7層：黄褐色土層（粘性普、しまり無、粒子やや粗、ローム粒を多量含む）

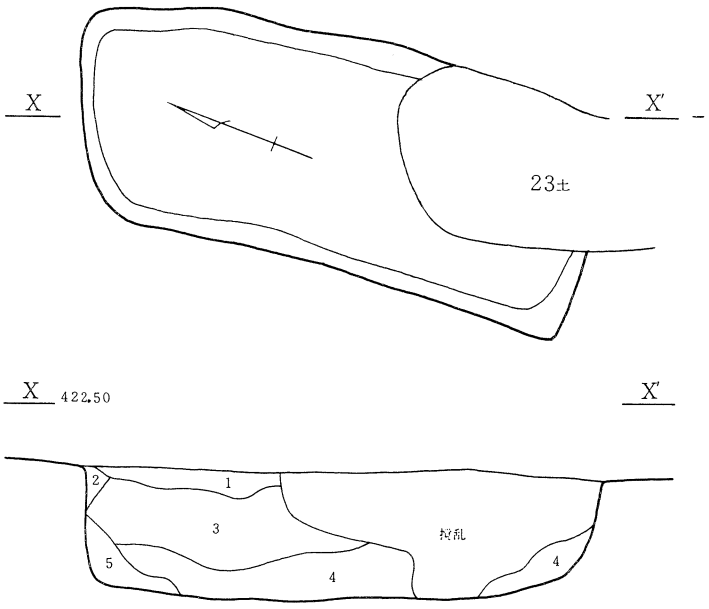




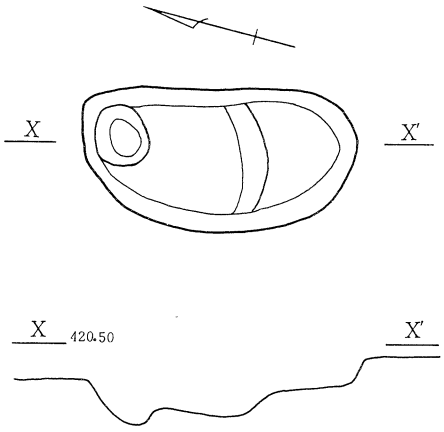
3号土壙
第1層：暗黄茶褐色土層（粘性やや弱、しまり無、粒子やや粗、ローム粒を多量、ローム小ブロックを含み、茶褐色土を少量含む）
第2層：暗黄茶褐色土層（粘性やや弱、しまり無、粒子やや粗、ロール粒を含み、ローム小ブロック・小礫を微量含む）
第3層：暗黄褐色土層（粘性弱、しまり無、粒子普、ローム小ブロック・ローム粒を多量含む）
第4層：暗黄茶褐色土層（粘性弱、しまり無、粒子普、ローム粒を含み、ローム小ブロックを少量含む）
第5層：暗黄茶褐色土層（ロームブロック主体層、粘性やや強、しまり有、粒子密、黒色粒子を少量含む）

0 1m

第5図　1号～4号土壙〔1/30〕

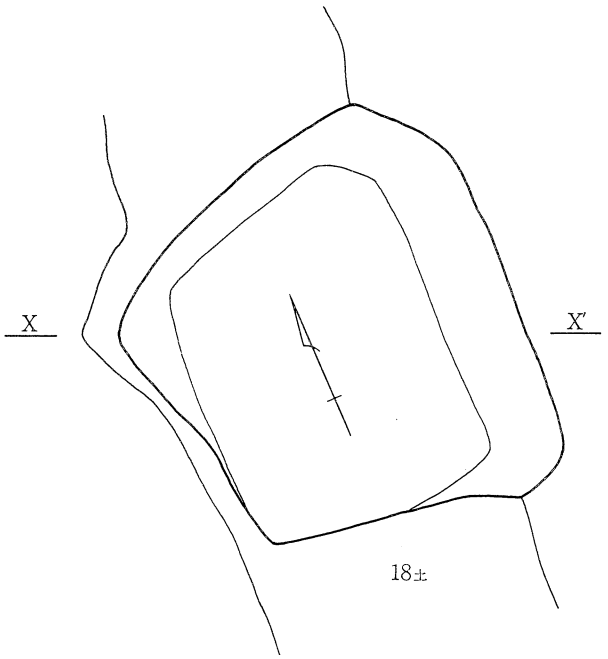


5号土壙

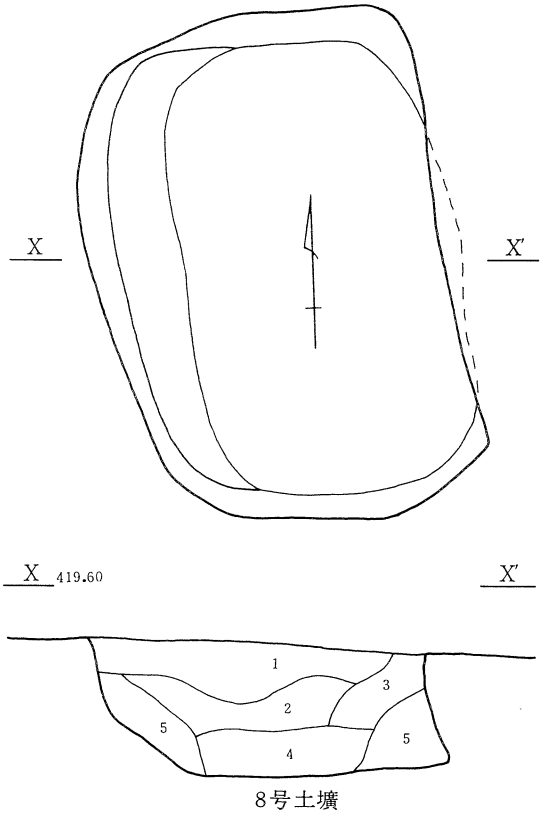


7号土壙

5号土壙
第1層：暗黄茶褐色土層（粘性やや弱、しまり無、粒子やや粗、ロール粒を多量、ローム小ブロック含み、茶褐色土を少量含む）
第2層：暗黄褐色土層　（粘性弱、しまり無、粒子やや粗、ロール粒を多量に含む）
第3層：暗黄褐色土層　（粘性弱、しまり無、粒子普、ローム小ブロックを多量、ローム粒を含む）
第4層：暗黄褐色土層　（粘性やや強、しまりやや有、粒子密、ロームブロックを多量、黒色粒子を少量含む）
第5層：暗黄茶褐色土層（粘性普、しまり無、粒子やや密、ロームブロック・茶褐色土粒を含む）



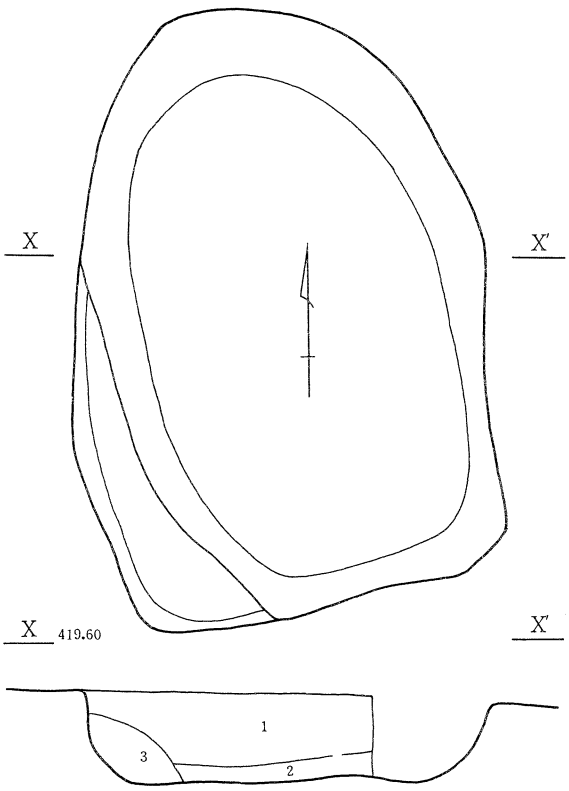
6号土壙



8号土壙

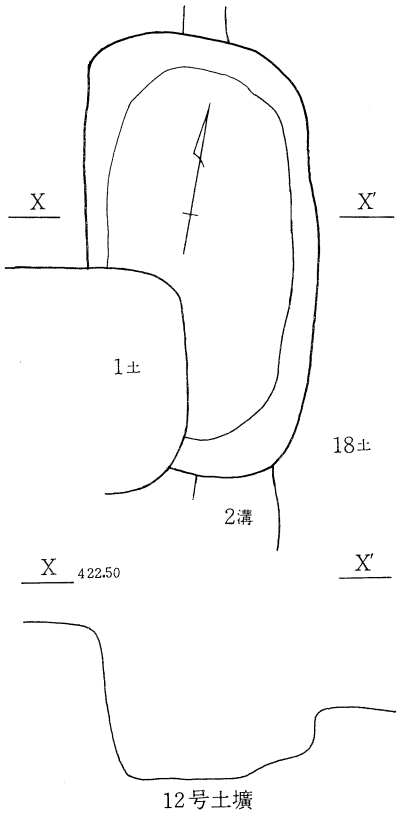
8号土壙
第1層：黄茶褐色土層（粘性無、しまり無、ロール粒・ロームブロックを少量含む）
第2層：黄茶褐色土層（粘性やや有、しまり普、ロームブロックを多量・ローム粒を少量含む）
第3層：黄茶褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒を少量含む）
第4層：黄茶褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒を中量含む）
第5層：黄茶褐色土層（粘性やや有、しまり有、ロームブロックを多量含む）

第6図　5号～8号土壙〔1/30〕　0　1m

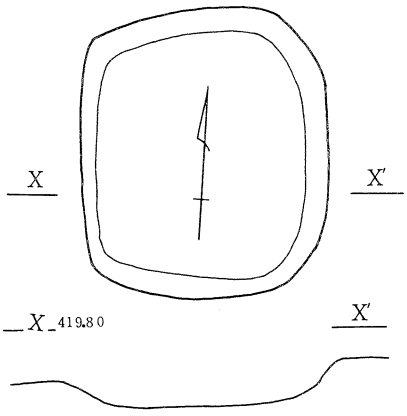


9号土壙

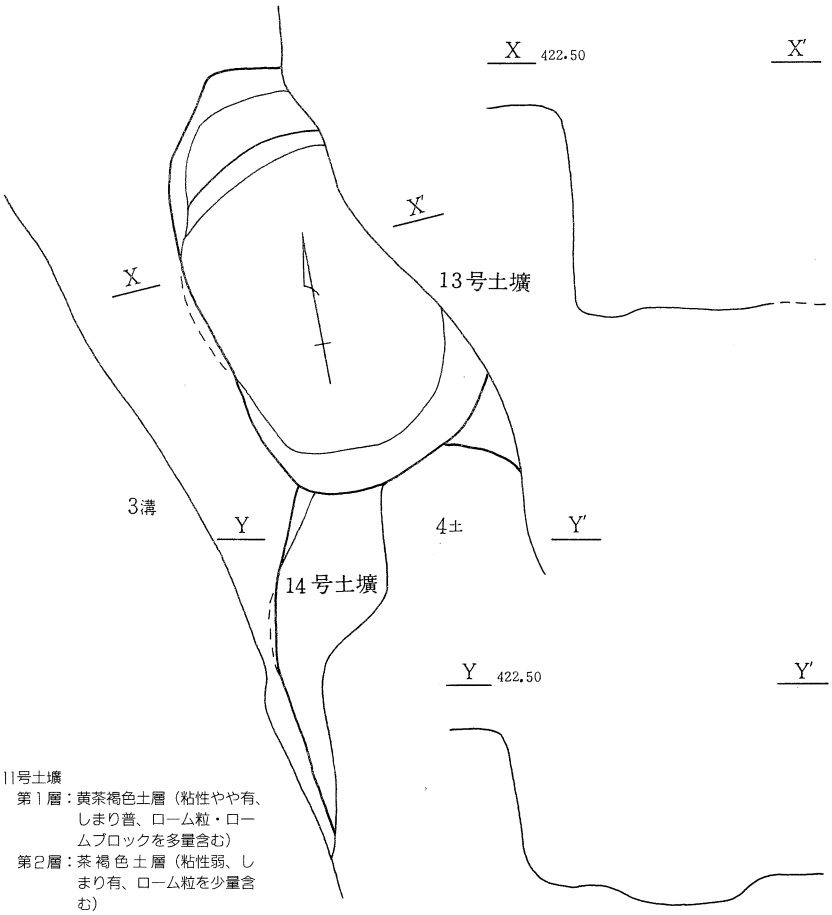
9号土壙
第1層：黄茶褐色土層（粘性無、しまり無、ロームブロックを含む）
第2層：黄褐色土層（粘性やや有、しまり有、ロームブロックを多量含む）
第3層：黄褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒を少量含む）

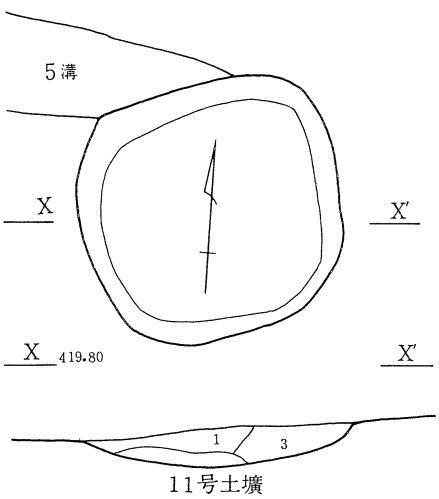


12号土壙



10号土壙



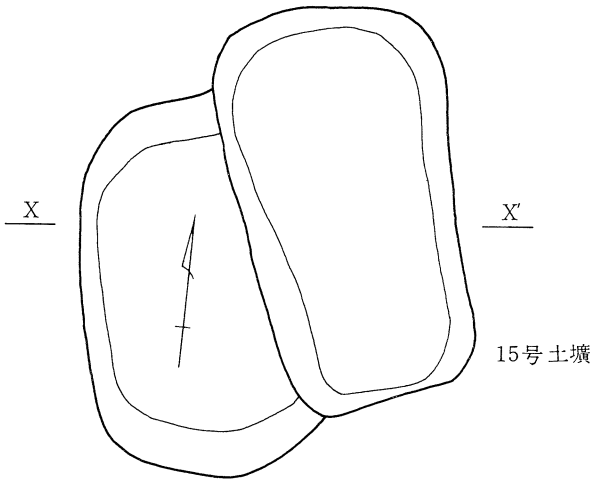


11号土壙

11号土壙
第1層：黄茶褐色土層（粘性やや有、しまり普、ローム粒・ロームブロックを多量含む）
第2層：茶褐色土層（粘性弱、しまり有、ローム粒を少量含む）
第3層：黄褐色土層（粘性有、しまり普、ロームブロックを多量含む）

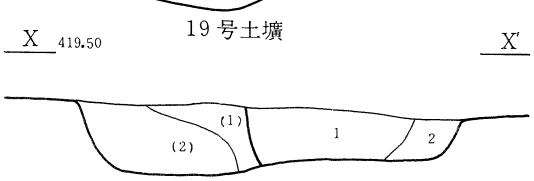
第7図　9号～14号土壙〔1/30〕

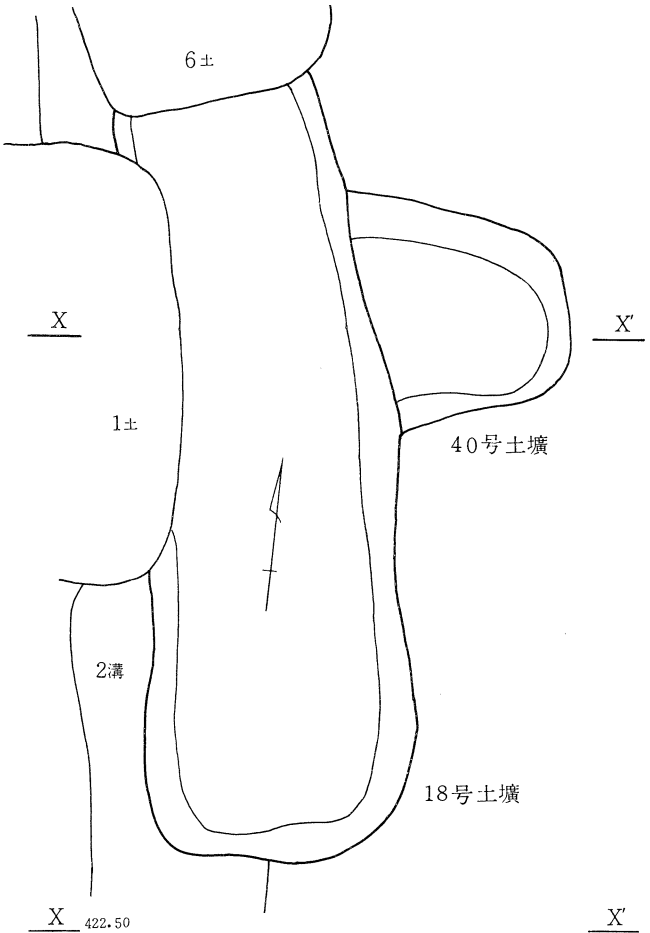
0　1m

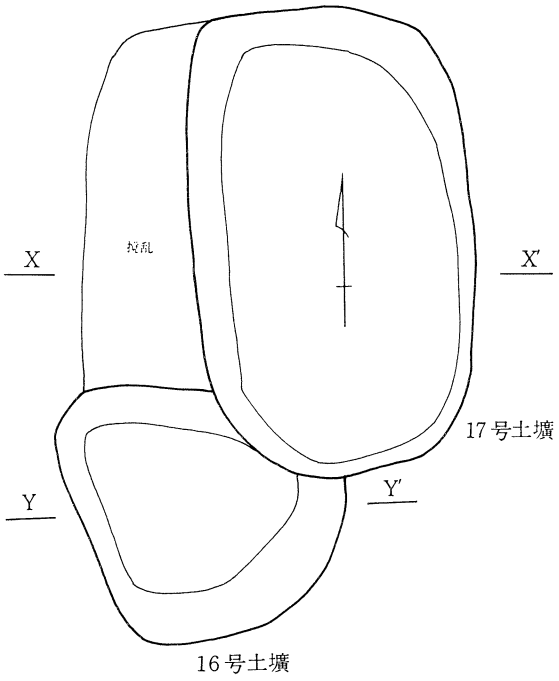


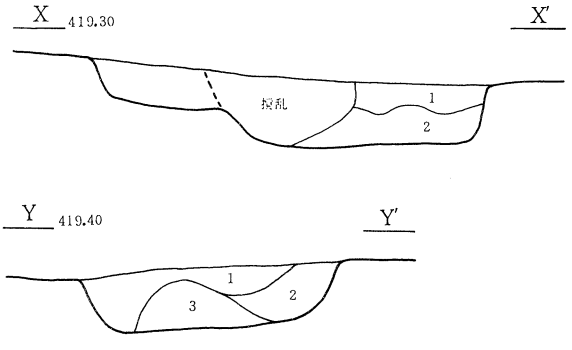
15号土壙
第1層：茶褐色土層（粘性無、しまり無）
第2層：茶褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒を少量含む）

19号土壙
第(1)層：黄褐色土層（粘性無、しまり有、ローム粒を多量含む）
第(2)層：黄褐色土層（粘性やや強、しまり無、ロームブロックを多量含む）





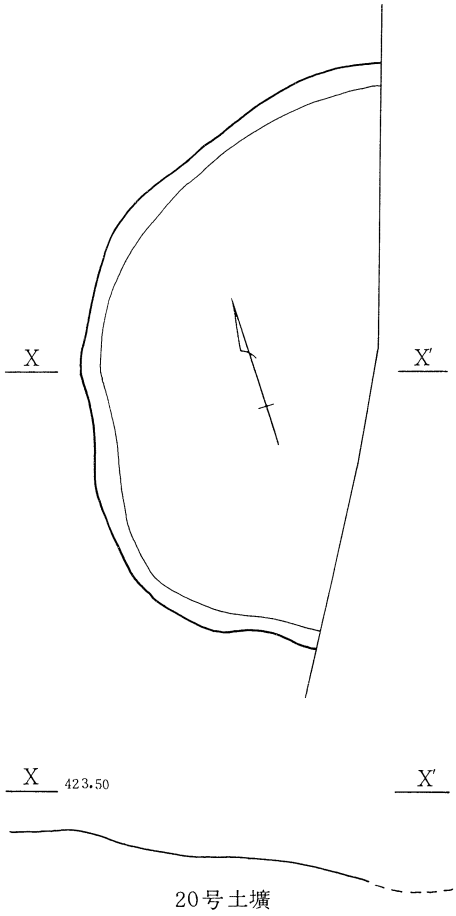




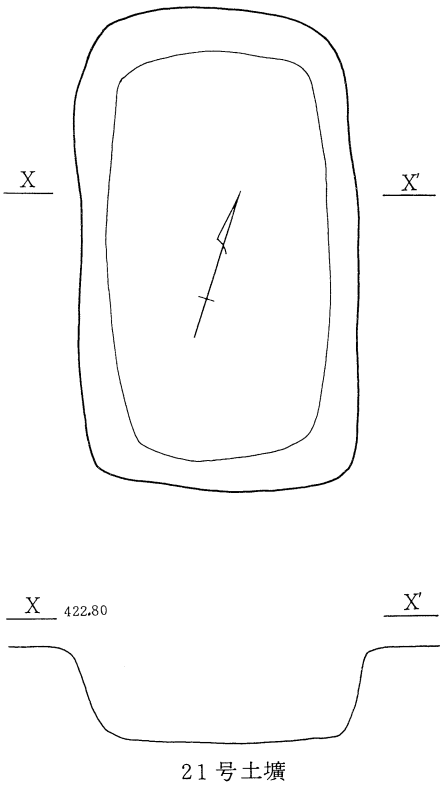
17号土壙
第1層：黄茶褐色土層（粘性弱、しまりやや有、ローム粒を多量含む）
第2層：黄茶褐色土層（粘性弱、しまり無、ロームブロックを多量含む）

16号土壙
第1層：黄茶褐色土層（粘性弱、しまりやや有、ローム粒を多量含む）
第2層：黄褐色土層（粘性無、しまり有、ローム粒を少量含む）
第3層：黄褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒を少量含む）

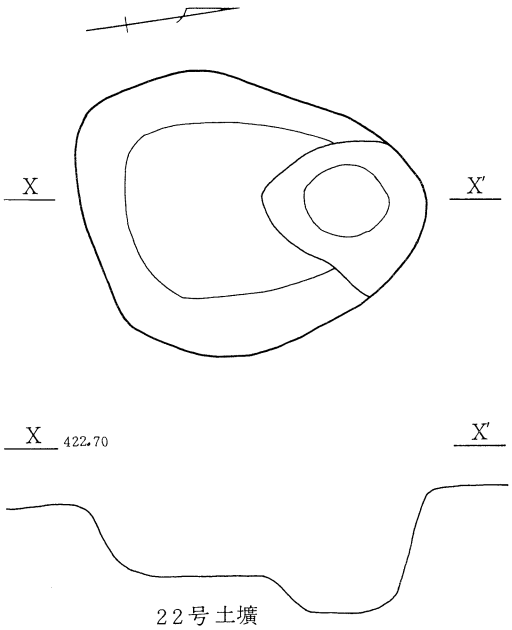
第8図　15号～19号・40号土壙〔1/30〕　0　1m



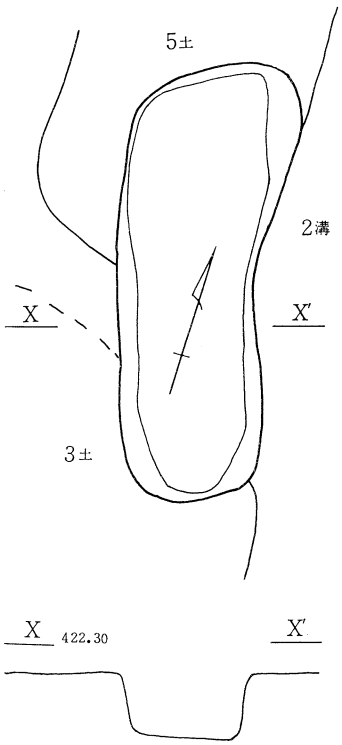
20号土壙



21号土壙



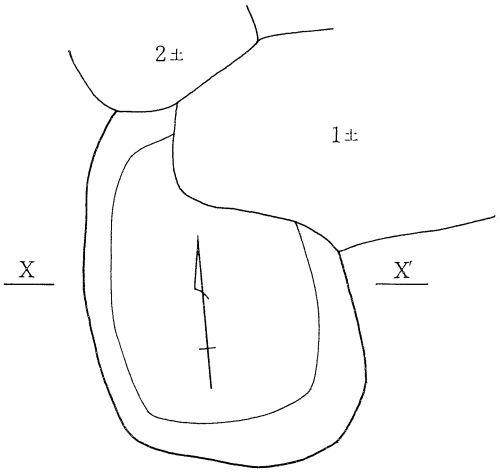
22号土壙

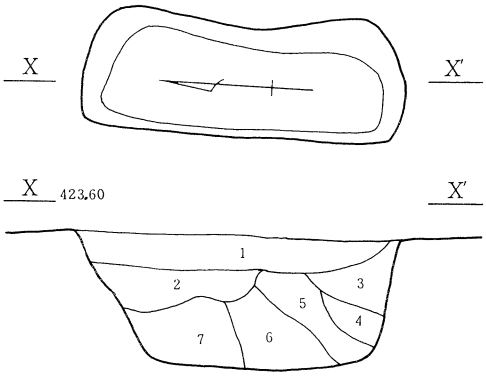


23号土壙

第9図　20号～23号土壙〔1/30〕

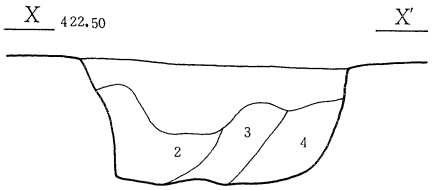
0　1m





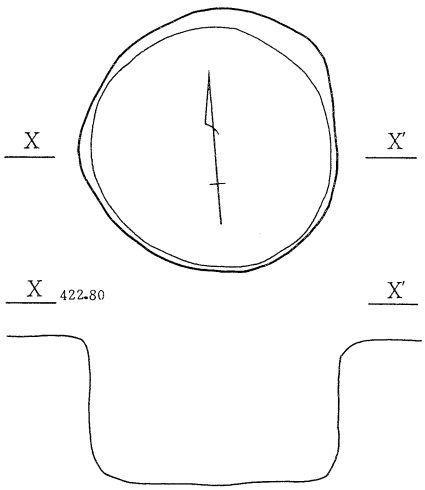
25号土壙

25号土壙
第1層：暗黄茶褐色土層（粘性有、しまり有、ローム粒・ロームブロックを含む）
第2層：暗黄茶褐色土層（粘性有、しまり有、ローム粒を多量含む）
第3層：暗茶褐色土層（粘性弱、しまり弱、ロームブロックを少量含む）
第4層：黄褐色土層（ローム主体層、粘性有、しまり有）
第5層：暗茶褐色土層（粘性弱、しまり普、ロームブロックを少量含む）
第6層：暗黄茶褐色土層（粘性弱、しまり普、ロームブロックを多量、ローム粒を少量含む）
第7層：暗黄茶褐色土層（粘性弱、しまり普、ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む）

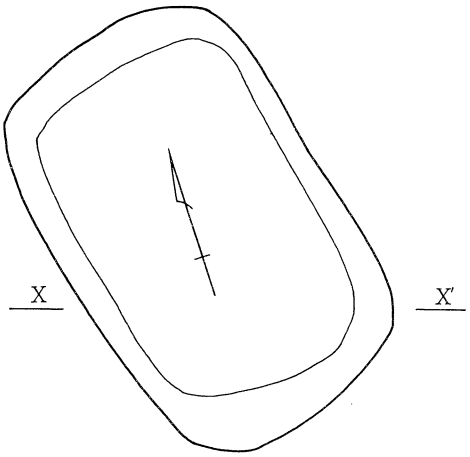


24号土壙

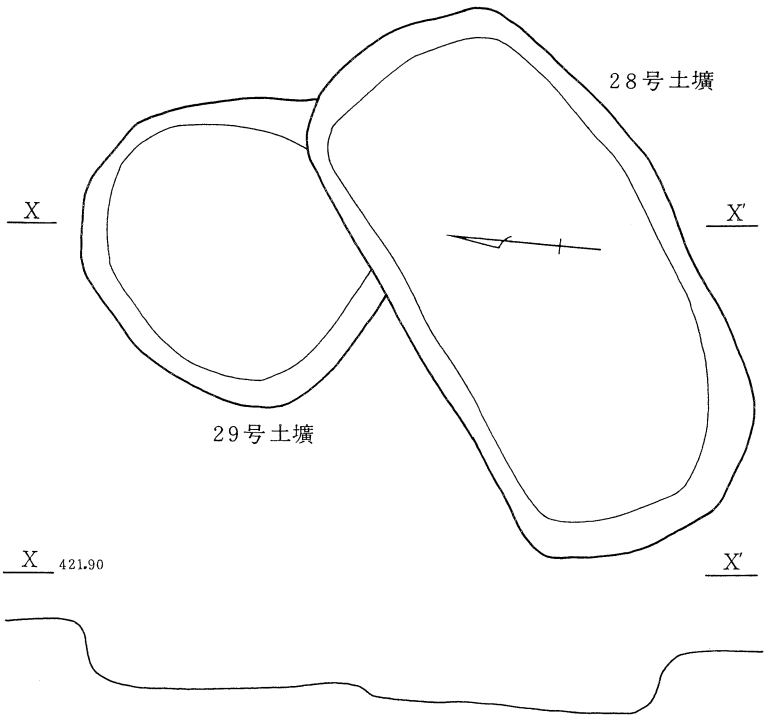
24号土壙
第1層：暗黄茶褐色土層（粘性弱、しまり無、粒子やや粗、ローム粒を含む）
第2層：暗黄茶褐色土層（粘性普、しまりやや有、粒子やや密、ローム粒を多量、ロームブロックを含む）
第3層：暗黄茶褐色土層（粘性普、しまり普、粒子やや密、ローム粒を含み、ロームブロックを少量含む）
第4層：暗黄茶褐色土層（粘性やや強、しまり普、粒子普、ローム粒を含み、ロームブロックを少量含む）



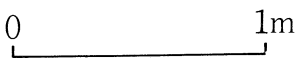
26号土壙

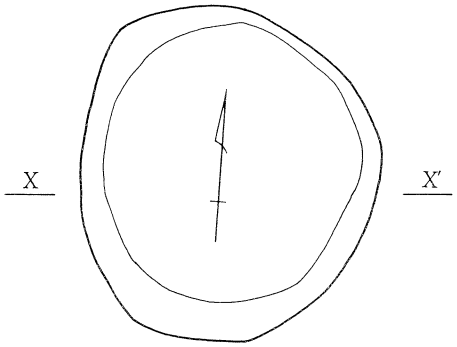


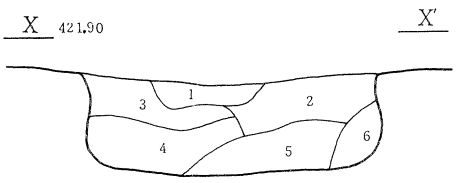
27号土壙



第10図　24号～29号土壙〔1/30〕

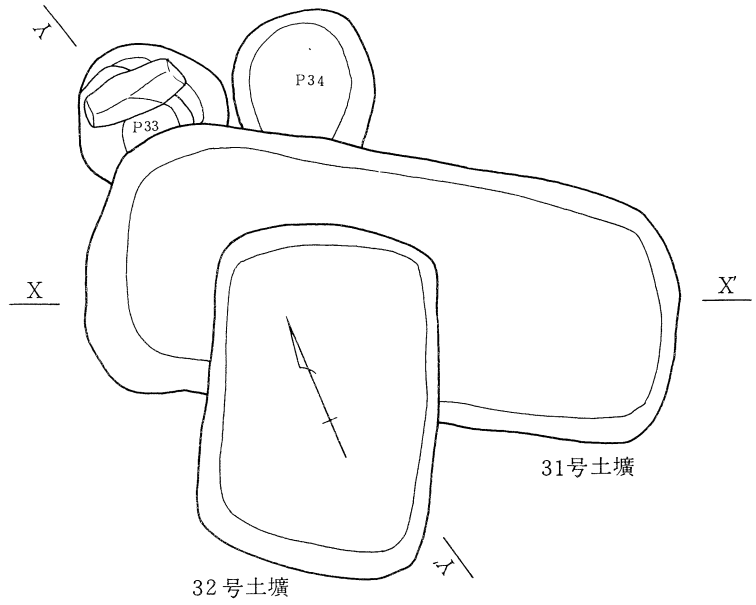






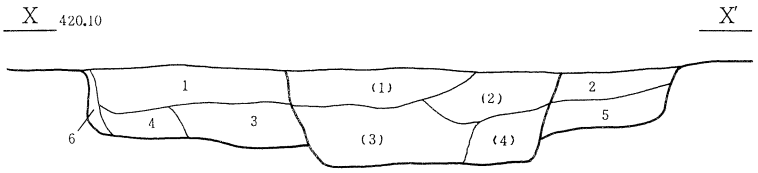
30号土壙

30号土壙
第1層：暗黄茶褐色土層（粘性やや弱、しまり無、ローム
ブロックを多量含む）
第2層：暗黄茶褐色土層（粘性やや弱、しまり無、ローム
ブロックを多量、ローム粒を中
量含む）
第3層：暗茶褐色土層（粘性やや弱、しまり無、ローム
粒を含む）
第4層：暗茶褐色土層（粘性やや弱、しまり無、ローム
ブロックを多量含む）
第5層：暗黄茶褐色土層（粘性有、しまり普、ロームブロ
ックを多量、ローム粒を中量含
む）
第6層：黄茶褐色土層（ロームブロック主体層、粘性有、
しまり有）



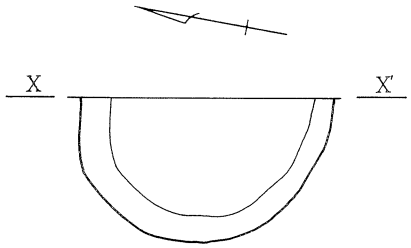
31号土壙

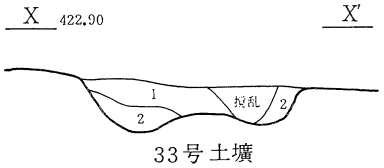
32号土壙



31号土壙
第1層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり有、ローム粒を少量、小礫を微量含む）
第2層：暗黄茶褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒を多量含む）
第3層：暗茶褐色土層（粘性有、しまり有、ローム粒を少量含む）
第4層：暗茶褐色土層（粘性有、しまり有、ローム粒、ロームブロックを含む）
第5層：黄茶褐色土層（ローム粒主体層、粘性有、しまり無）
第6層：黄茶褐色土層（ロームブロック主体層、粘性有、しまり有）
第①層：暗黄茶褐色土層（粘性やや弱、しまりやや有、炭化物・焼土・ローム粒を
量含む）
第②層：暗黄茶褐色土層（粘性無、しまり有、炭化物が中量、ローム粒を少量含む）
第③層：黄茶褐色土層（ロームブロック主体層、粘性有、しまり有）

32号土壙
第(1)層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり有、ローム粒を少量、小礫を微量含む）
第(2)層：暗黄茶褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒を多量含む）
第(3)層：暗黄茶褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒を多量含む）
第(4)層：暗黄茶褐色土層（粘性有、しまりやや有、ローム粒を多量、ロームブロッ
クを中量含む）



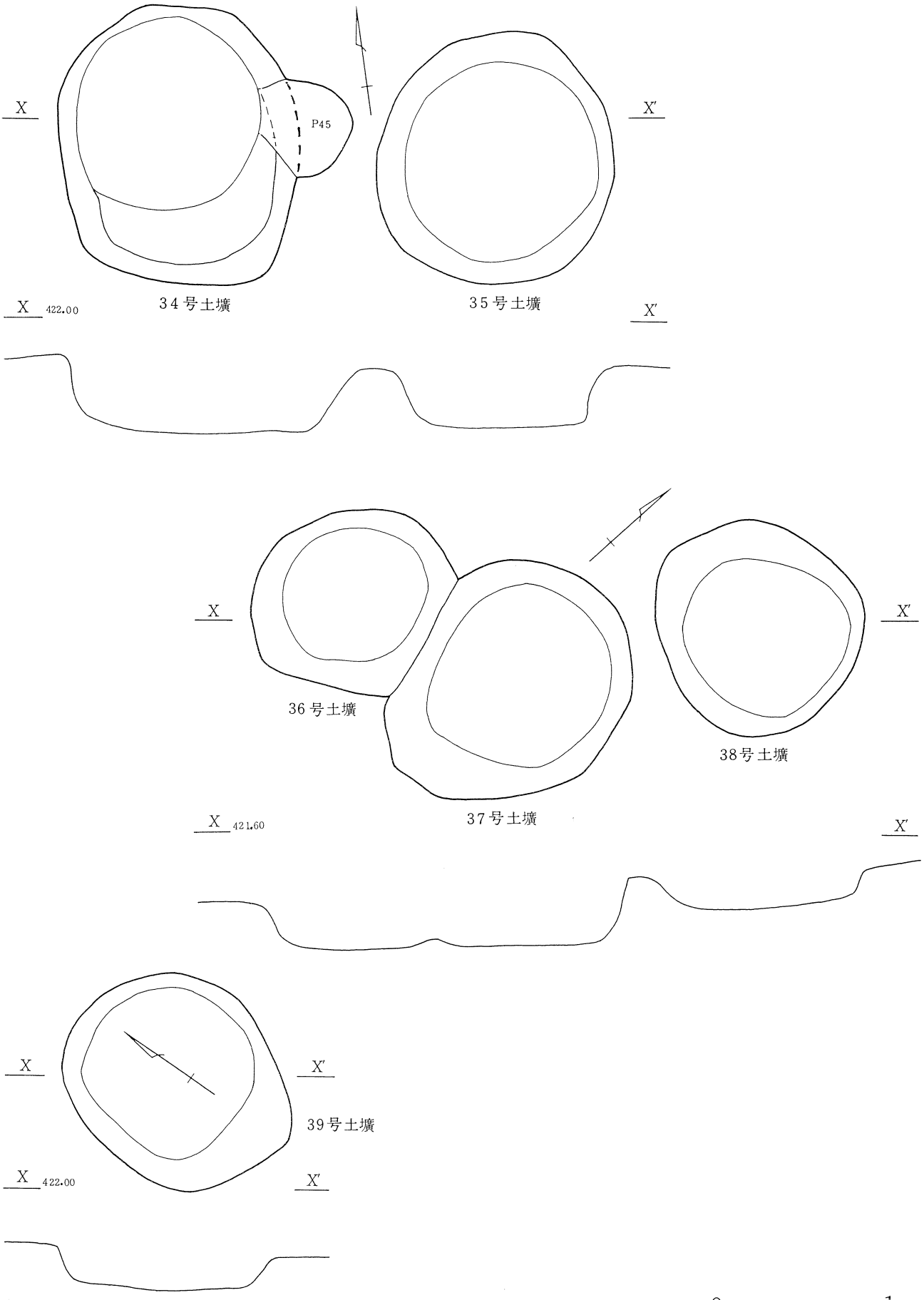


33号土壙

33号土壙
第1層：暗黄茶褐色土層（粘性弱、しまり普、ローム粒、ロームブロ
ックを中量、黒色粒子を微量含む）
第2層：黄茶褐色土層（ロームブロック主体層、粘性有、しまり普）

第11図　30号～33号土壙〔1/30〕

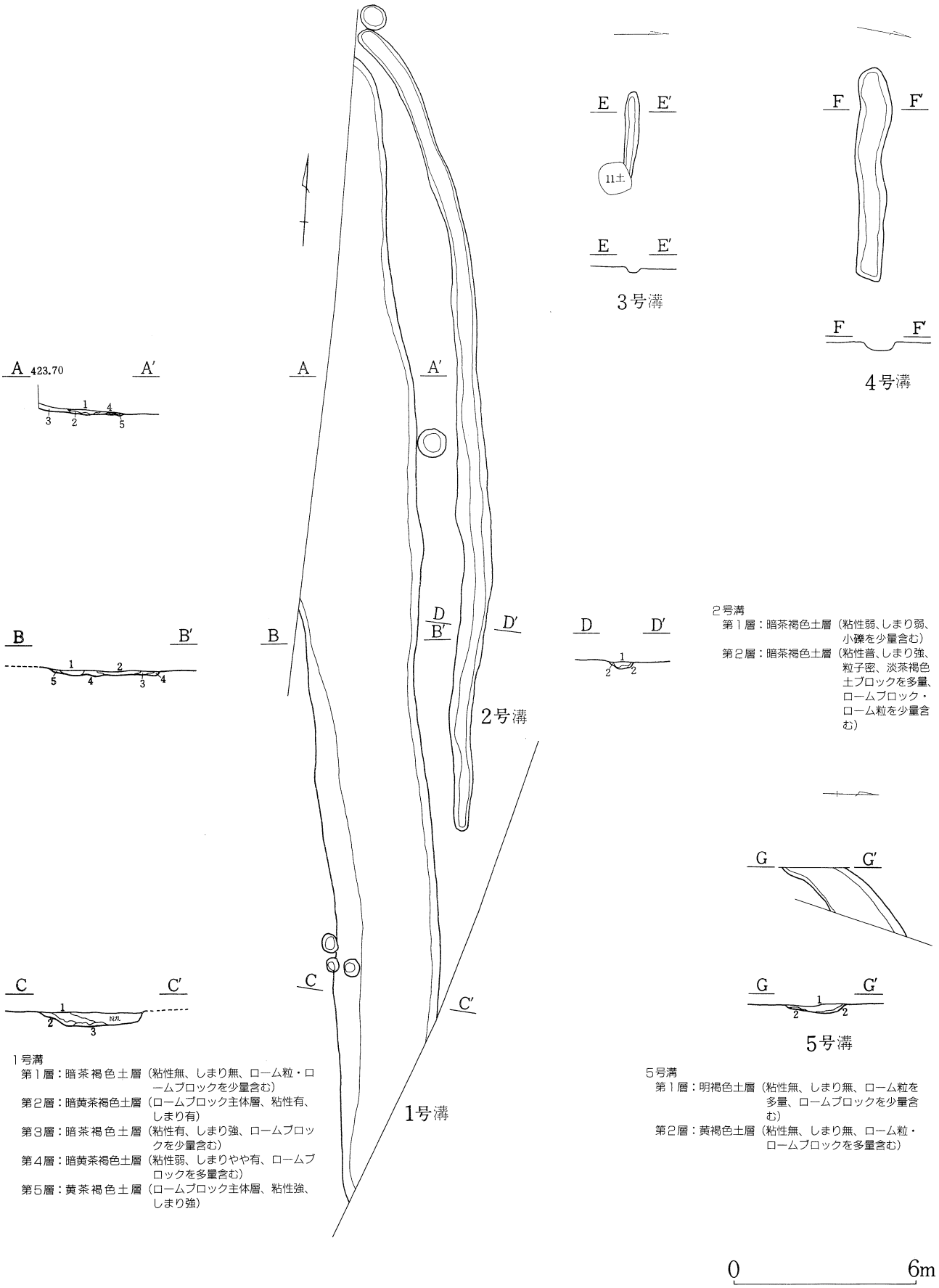
0　1m



第12図　34号～39号土壙〔1/30〕

第2表　土　壙　一　覧　表

No.	位　置	平面形	断面形	壙低	規模（長軸×短軸.深さ）cm	主軸方位	切　合　関　係	備　　考
1	I－2	不整長方形	深鉢状	平　坦	138×90　50	N－80°－E	2土・12土・24土を切る	一部段部有
2	H•I－2	不整長方形	深鉢状	平　坦	226×94　50	N－5°－E	1土・24土に切られる	一部オーバーハング
3	H－2	（不整方形）	深鉢状	平　坦	170×（160）　50	N－87°－E	23土に切られる	土器片（加曽利E）
4	H－2	不整長方形	深鉢状	平　坦	240×110　60	N－S	13土を切り、14土に切られる	土器片（加曽利E）
5	H－2	長　方　形	深鉢状	平　坦	215×94　50	N－S	23土・2溝に切られる	
6	H•I－2	不整方形	深鉢状	平　坦	170×150　60	N－8°－W	18土を切り、2溝に切られる	
7	F－3	楕　円　形	皿　状	ピット有	108×58　20	N－15°－W		耕作土によるものか
8	D－3•4	不整楕円形	深鉢状	平　坦	210×135　55	N－12°－W		一部オーバーハング
9	D－3	長　方　形	浅鉢状	平　坦	244×170　38	N－15°－W		
10	D－3	方　　形	皿　状	湾　曲	118×100　16	N－4°－W		耕作土によるものか
11	D－2•3	円　　形	皿　状	湾　曲	104×100　16	N－16°－W	3溝に切られる	耕作土によるものか
12	I－2	不整長方形	深鉢状	平　坦	170×80　60	N－10°－E	1土・2溝に切られ、18土を切る	
13	H•G－2	不整楕円形	深鉢状	平坦•段部有	175×（75）　85	N－18°－E	4土・14土を切る	
14	H－2	――――	深鉢状	平　坦	――――	――――	4土・13土に切られる	土器片（曽利Ⅳ）
15	C•D－3	長　方　形	浅鉢状	平　坦	160×84　22	N－17°－W	19土を切る	
16	C－3•4	円　　形	浅鉢状	湾　曲	120×（110）　24	N－20°－E	17土に切られる	
17	C•D－3	長　方　形	浅鉢状	平　坦	190×110　28	N－S	16土を切る	土器片（曽利Ⅱ）
18	H•I－2•3	長　方　形	深鉢状	平　坦	－×194　64	N－S	6土・12土・2溝に切られる	
19	C•D－3	楕　円　形	浅鉢状	平　坦	154×（70）　28	N－17°－W	15土に切られる	
20	N－2	――――	浅鉢状	湾　曲	（240）×（118）×（18）	（N－23°－E）		
21	K－2	長　方　形	深鉢状	平　坦	198×110　38	N－20°－W	1溝に切られる	
22	I•J－2	円　　形	浅鉢状	段部有	140×110　50	N－10°－E	1溝に切られる	
23	H－2	不整長方形	深鉢状	平　坦	180×55　28	（N－11°－W）	3土・5土を切り、2溝に切られる	
24	I－2	楕　円　形	深鉢状	平　坦	160×100　50	N－11°－W	1土・2土に切られる	
25	J－2	不整長方形	深鉢状	平　坦	130×44　55	N－S		
26	K－3	円　　形	深鉢状	平　坦	105×100　58	N－S		
27	B•C－3	長　方　形	浅鉢状	やや湾曲	175×110　30	N－11°－W		土器片（曽利）
28	W－2	長　方　形	浅鉢状	平　坦	230×120　26	N－55°－E	29土を切る	土器片（曽利）
29	W－2	円　　形	浅鉢状	平　坦	128×（120）　26	N－68°－E	28土に切られる	
30	W－3	円　　形	浅鉢状	平　坦	135×120　36	N－8°－W		一部オーバーハング
31	W•X－2	長　方　形	浅鉢状	平　坦	236×105　32	N－57°－W	32土に切られる	
32	X－2	長　方　形	浅鉢状	平　坦	140×92　40	N－29°－E	31土を切る	土器片（曽利Ⅱ）
33	T－2	――――	浅鉢状	湾　曲	（100）×（58）　20	――――		土器片（曽利Ⅱ）
34	W－2	円　　形	浅鉢状	やや湾曲	158×（135）　40	N－9°－E	P45に切られる	
35	W－2•3	円　　形	浅鉢状	平　坦	140×130　32	N－10°－E		
36	X－2	円　　形	浅鉢状	やや湾曲	110×100　30	N－20°－E		
37	X－2	円　　形	浅鉢状	やや湾曲	146×116　36	N－20°－W		土器片（曽利V）
38	X－2	円　　形	浅鉢状	やや湾曲	122×112　20	N－50°－W		土器片（曽利V）
39	W－2	円　　形	浅鉢状	やや湾曲	135×110　22	N－S		
40	I－3	長　方　形	深鉢状	平　坦	――――	――――	18土に切られる	

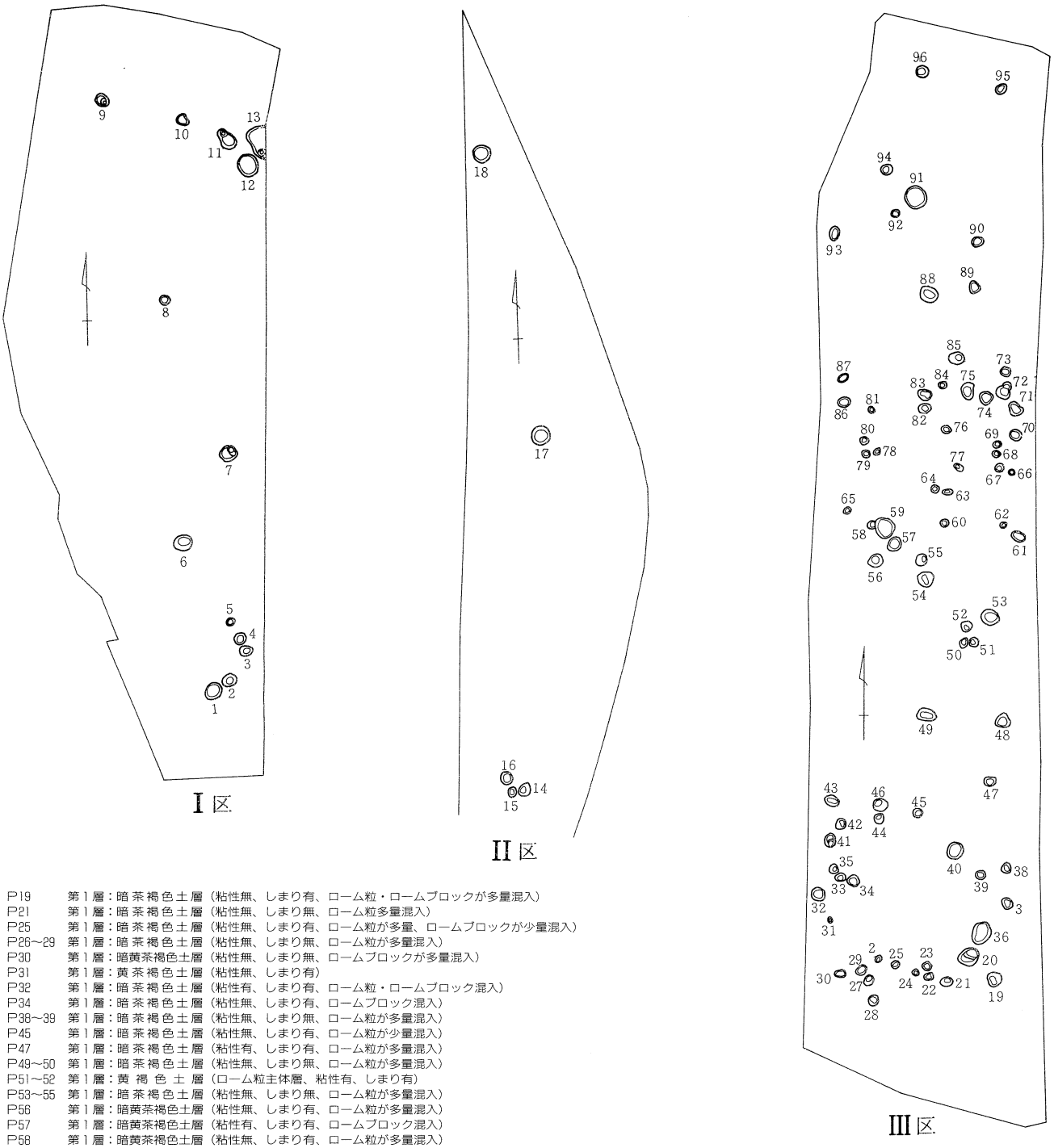


1号溝
第1層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒・ロームブロックを少量含む）
第2層：暗黄茶褐色土層（ロームブロック主体層、粘性有、しまり有）
第3層：暗茶褐色土層（粘性有、しまり強、ロームブロックを少量含む）
第4層：暗黄茶褐色土層（粘性弱、しまりやや有、ロームブロックを多量含む）
第5層：黄茶褐色土層（ロームブロック主体層、粘性強、しまり強）

2号溝
第1層：暗茶褐色土層（粘性弱、しまり弱、小礫を少量含む）
第2層：暗茶褐色土層（粘性普、しまり強、粒子密、淡茶褐色土ブロックを多量、ロームブロック・ローム粒を少量含む）

5号溝
第1層：明褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む）
第2層：黄褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒・ロームブロックを多量含む）

第13図　1号～5号溝状遺構〔1/180〕



P19　第1層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり有、ローム粒・ロームブロックが多量混入）
P21　第1層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒多量混入）
P25　第1層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり有、ローム粒が多量、ロームブロックが少量混入）
P26～29　第1層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒が多量混入）
P30　第1層：暗黄茶褐色土層（粘性無、しまり無、ロームブロックが多量混入）
P31　第1層：黄茶褐色土層（粘性無、しまり有）
P32　第1層：暗茶褐色土層（粘性有、しまり有、ローム粒・ロームブロック混入）
P34　第1層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり有、ロームブロック混入）
P38～39　第1層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒が多量混入）
P45　第1層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり有、ローム粒が少量混入）
P47　第1層：暗茶褐色土層（粘性有、しまり有、ローム粒が多量混入）
P49～50　第1層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒が多量混入）
P51～52　第1層：黄褐色土層（ローム粒主体層、粘性有、しまり有）
P53～55　第1層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒が多量混入）
P56　第1層：暗黄茶褐色土層（粘性無、しまり有、ローム粒が多量混入）
P57　第1層：暗黄茶褐色土層（粘性有、しまり有、ロームブロック混入）
P58　第1層：暗黄茶褐色土層（粘性無、しまり有、ローム粒が多量混入）
P61　第1層：暗黄茶褐色土層（粘性有、しまり有、ロームブロック・黒色土が多量混入）
P64　第1層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり無、ロームブロック混入）
P68　第1層：茶褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒混入）
　　第2層：黄褐色土層（粘性無、しまり無）
P71～72　第1層：黄褐色土層（ローム粒主体層、粘性無、しまり無）
P73　第1層：黒褐色土層（粘性無、しまり有、黒色土粒を多量、ローム小ブロックが少量混入）
P75～76　第1層：黄褐色土層（ロームブロック主体層、粘性無、しまり無、茶褐色土混入）
P83～85　第1層：暗黄茶褐色土層（粘性有、しまり有、ローム粒が多量混入）
P86　第1層：暗茶褐色土層（粘性有、しまり有、ローム粒が微量混入）
P87～88　第1層：黄茶褐色土層（粘性無、しまり有、ローム粒が多量、ロームブロックが少量混入）
P89　第1層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒が少量混入）
P90～91　第1層：黄褐色土層（粘性無、しまり有、茶褐色土・ロームブロック・黒色粒子が混入）
P92　第1層：茶褐色土層（粘性無、しまり有、ローム粒が少量混入）
P93　第1層：暗茶褐色土層（粘性無、しまり有、ローム粒が少量、ロームブロックが微量混入）
P94　第1層：茶褐色土層（粘性無、しまり無、ローム粒が多量、黒色粒子が少量混入）
P95　第1層：茶褐色土層（粘性有、しまり有、ローム粒が混入）
P96　第1層：茶褐色土層（粘性無、しまり有、ローム粒が少量混入）
P97　第1層：黄褐色土層（ローム主体層、粘性無、しまり無、茶褐色土混入）

第14図　ピット群（Ⅰ区～Ⅲ区）〔1/300〕

0　15m

第３表　ピット規模（ピット群）

（単位：cm）

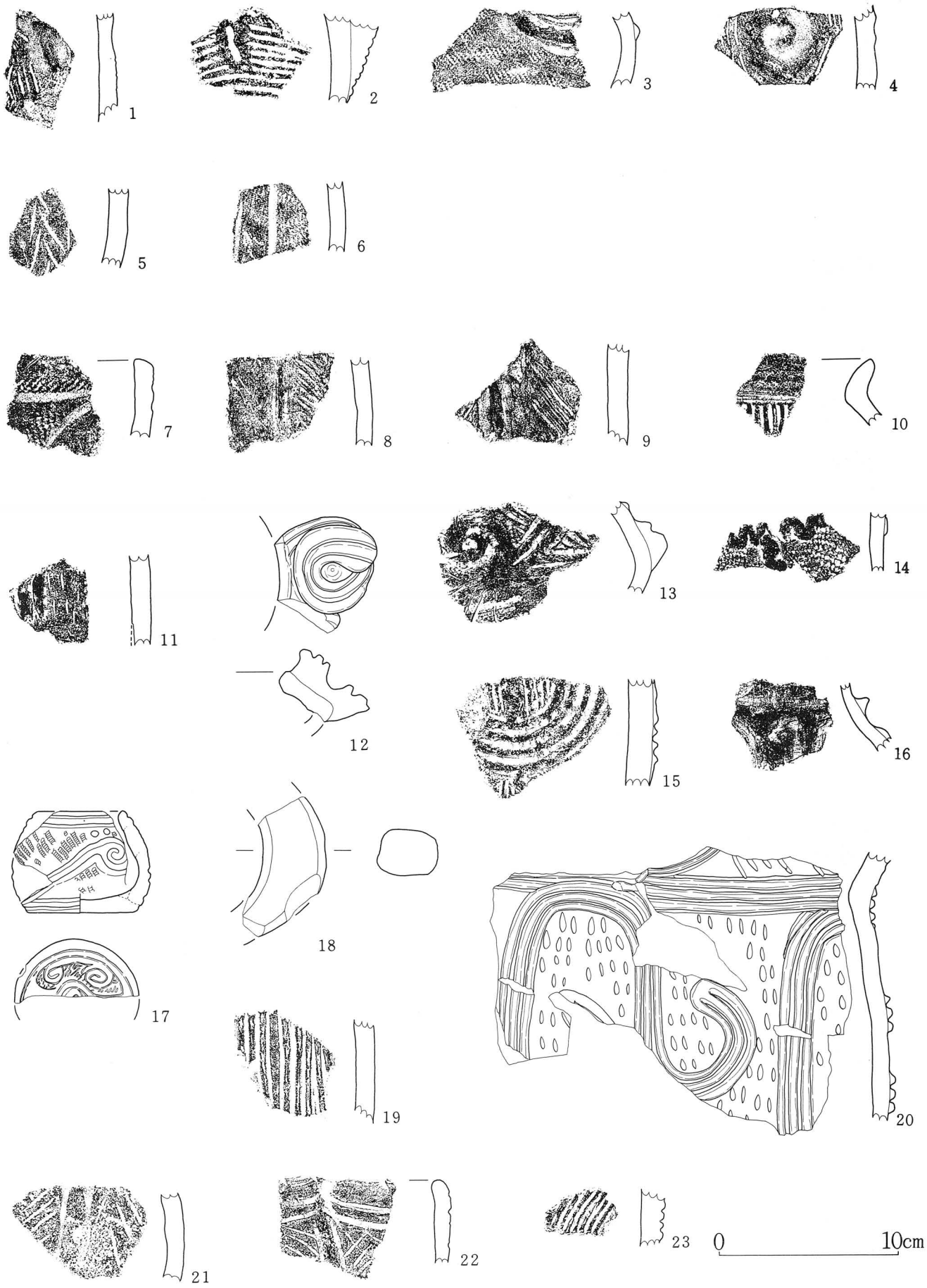
ピットNo.	長軸	短軸	深さ	ピットNo.	長軸	短軸	深さ	ピットNo.	長軸	短軸	深さ	ピットNo.	長軸	短軸	深さ	ピットNo.	長軸	短軸	深さ
1	90	80	22	21	60	40	34	41	62	48	39	61	65	40	26	81	30	30	23
2	60	50	23	22	45	30	15	42	50	42	23	62	30	25	25	82	60	50	28
3	55	50	18	23	45	40	14	43	47	40	48	63	50	30	38	83	68	45	27
4	50	48	9	24	40	28	14	44	50	50	27	64	50	30	14	84	42	35	26
5	40	32	15	25	35	30	11	45	45	40	14	65	30	30	17	85	75	50	29
6	88	70	15	26	34	30	25	46	72	60	25	66	35	35	21	86	60	50	15
7	80	72	34	27	48	40	25	47	50	48	13	67	45	40	38	87	50	30	11
8	52	44	4	28	48	40	11	48	74	64	27	68	30	30	17	88	86	65	37
9	65	55	6	29	50	42	18	49	82	60	23	69	35	35	21	89	60	45	19
10	60	50	13	30	55	40	27	50	55	38	26	70	65	48	13	90	55	55	10
11	108	65	30	31	38	30	23	51	50	38	26	71	68	52	15	91	115	105	19
12	110	98	10	32	70	60	15	52	54	40	27	72	80	45	11	92	45	35	25
13	160	(55)	34	33	(52)	(32)	20	53	85	78	13	73	45	40	21	93	55	48	27
14	60	50	42	34	(55)	(55)	49	54	74	65	25	74	70	60	30	94	55	38	28
15	50	38	20	35	38	38	14	55	55	52	16	75	80	58	37	95	55	45	13
16	65	55	16	36	85	78	8	56	68	50	27	76	40	35	34	96	65	45	31
17	98	92	15	37	55	45	20	57	68	60	14	77	40	30	31				
18	90	72	26	38	50	35	28	58	50	45	9	78	35	35	18				
19	70	65	28	39	45	38	19	59	105	94	23	79	40	35	14				
20	98	82	33	40	110	80	5	60	40	35	14	80	30	28	24				

第２節　出　土　遺　物

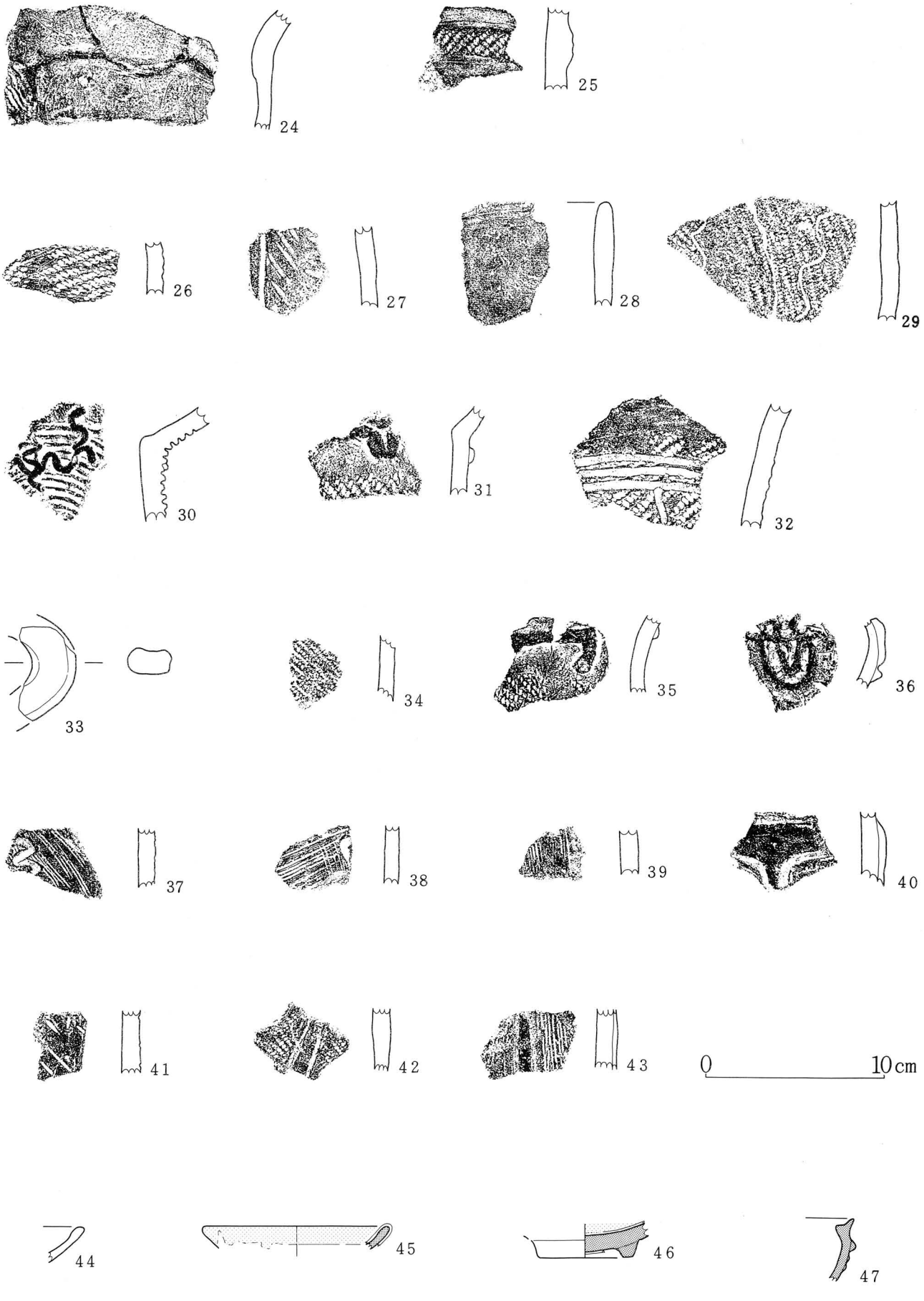
１）土器　今回の調査では、遺構確認面の攪乱が著しく、良好な遺物を発見することが出来なかった。出土土器の破損も激しく、図示しえたものは47点である。そのうち４点は中・近世のもので、他は全て縄文時代中期後葉曽利式及び加曽利Ｅ式の範疇に含まれるものである。他に図示しえなかったが中期中葉及び後期に降るものも僅かに出土している。

１～６は２号住居址から出土した。２、３は曽利Ⅱ式、他は曽利Ⅳ～Ⅴ期であろう。７は３号土壙、４は４号土壙出土、共に加曽利Ｅ式系土器。９は14号土壙出土で曽利Ⅳ期。10は17号土壙出土で曽利Ⅱ～Ⅲ期の鉢口縁部。11は27号土壙出土。12～15は28号土壙出土で曽利Ⅰ～Ⅱ期にあたろう。12は口縁部で渦巻状の小突起を持つ。16～19は38号土壙出土。16は太い１本引沈線、17は小型鉢型土器で口縁及び胴下端に各々２条の沈線が巡り、蕨手状の沈線文の地を縄文でうめる。底部外面にも文様が施され、蕨手状の渦巻文の内部を短沈線で充填する。曽利Ⅱ期か。18は曽利期所産のＸ字状把手の一部。20は33号土壙出土、頸部に３条の隆線を施し胴部は逆Ｕ字状、逆Ｊ字状の隆線文で地文は、いわゆる雨だれ文である。おそらく曽利Ⅱ期所産のＸ字状把手付土器の一部であろう。21は37号土壙、22・23は38号土壙出土、21・22は曽利Ⅴ期所産。24・25は３号溝出土で加曽利Ｅ式系土器。26はP_4出土、27～28はP_{28}出土で曽利期のもの。29は縄文による地文に波状沈線を施す。30は太い沈線に波状（Ｓ字状）に貼り付け文を施す。曽利Ⅱ期のものであろう。33～43は一括遺物で、全て曽利Ⅱ～Ⅳ期と思われる。44～47は一括遺物である。44はカワラケ片。淡明褐色を呈し、胎土・焼成共良好。45～47は陶器類である。45は明茶褐色、46は内面黒色、底部緑灰色系の釉がかけられている。47は受口状の口縁を有し、外面には円形状の小突起がつけられている。

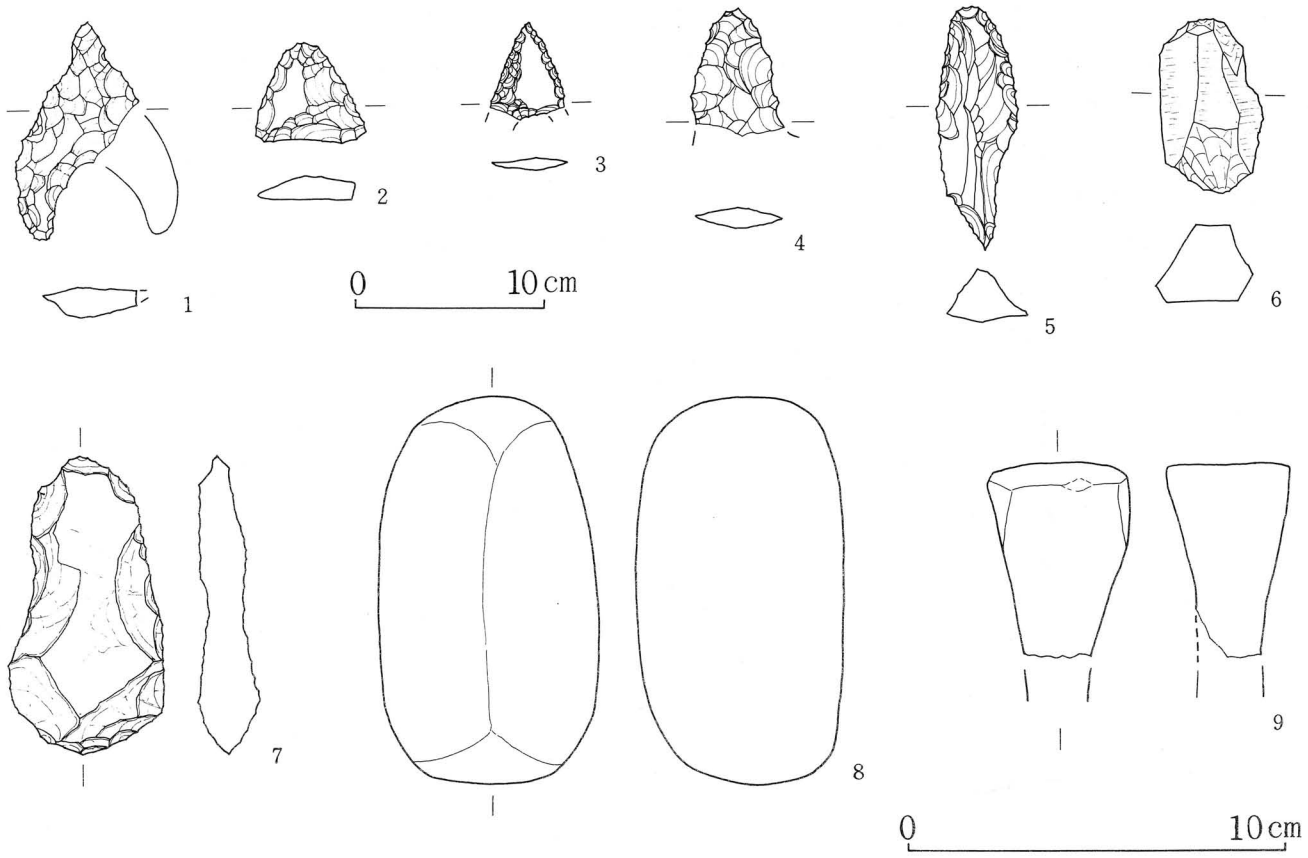
２）石器　１～３は黒耀石製の石鏃。１・３は有脚鏃で、３は脚部を失なっている。４は刃部先端。５・６は水晶製で、６は35ｇを測る原石であるが両端を敲打されている。７は小型の打製石斧、粘板岩製で重量は60ｇで、刃部はかなり磨耗している。８は磨石、凝灰岩製で520ｇ、両端部使用。９は砥石、４面が使用され、かなりとぎ減りしている。８が１号溝覆土から出土しているが、他は一括遺物である。



第15図　出　土　土　器　(1)〔1/3〕



第16図　出　土　土　器　(2)〔1/3〕



第17図　出土石器〔1～5—1/1、6～9—1/2〕

第Ⅳ章　調査の成果と課題

遺跡の状態は、これまで述べてきた様に削平攪乱が激しく決して良好なものではなかった。しかし調査の結果多くの成果を得ることができた。

検出した遺構は下記の通りである。

竪穴住居址　　2軒
土　　壙　　40基
溝状遺構　　5本
ピ　ッ　ト　　96個

竪穴住居址は、2軒とも遺存状態が極めて悪く炉及び柱穴が確認されたに過ぎない。2号住居址は、柱穴の配置等から2軒が重複している可能性が高く3軒になるとも考えられる。共に地床炉で柱穴は5～6角形に配置されているが、規模は明確にしえない。時期は、2号住居址が縄文中期後葉－曽利期と考えられるが、1号住居址からは時期を判定しうる遺物が出土していない。2号住居址とほぼ同様な内容で概略同じ時期と思われるが、位置関係から同時存在は難かしく微妙な時期差が考えられる。地形的には尾根状、平坦面の南縁部に占地し、細かく観察すると、1号住居址は平坦面に、2号住居址は傾斜変更線上にあたる。

土壙は、総数で40基検出されたが、大別すると長方形を基調とするものと、円形を基調するものとに分けられ、3箇所にそれぞれ密集して分布している事は前に述べた通りである。

Ⅰ・Ⅱ区に存在するものは長方形を呈するものを主体とし、特に密集して構築されるものは、1、2の例外を除いて全て長方形を基調としている。また主軸方位も、N－SからN－20°－Wの範囲におさまるものがほとん

どで、それ以外の１号、40号土壙についても、ほぼそれに直交して構築されている。またこれらの土壙群は、主軸方位を同一にとるばかりでなく、主軸線もほぼ同一にとり、列状をなしている。平坦部あるいは、非常になだらかな傾斜部であるⅠ・Ⅱ区に対して、南向きの傾斜面にあたるⅢ区南端には、平面円形を呈する土壙群が存在する。土壙は半円形を描くように配列され、周囲に存在するピット群を合せると環状を呈するものである。28・31・32号土壙は長方形を呈しているが、Ⅰ・Ⅱ区のものとは主軸方位をほぼ90°振って構築されていることも興味深い。また１号住居址の脇には、33号土壙が構築され、比較的良好な土器片が出土している。出土遺物は、この33号土壙を含み、10基の土壙から発見されているが、全て曽利期及びその併行期の所産のものであり、住居址の年代とも一致している。

これらの土壙の内容・性格等については、明確にしえないが形状、構築された場所の微地形、住居址との位置関係などから、Ⅰ・Ⅱ区のものと、Ⅲ区のものとでは、明らかに差異が存在することは注目される。

出土遺物の年代がほぼ同一であることなどから考えて、曽利期の集落を構成するものであろうか。

ピットは主にⅢ区から検出された。住居址周囲、Ⅰ区北端、Ⅲ区南端部土壙群周囲に集中している。住居址周囲のものは孤状を描くように分布し、住居の柱穴の可能性も検討したが明らかでなかった。Ⅰ区北端のものは、遺跡平坦部の北限でもあり、遺構群の北端を画するものとも思われる。Ⅲ区南端のP_{25}・P_{28}・P_{35}からは曽利期を中心とする遺物が出ており、おおよその時期を示すものであろう。

これらの縄文時代の遺構群は、縄文中期後葉－（曽利Ⅱ～同Ⅴ期）の集落の一部をなすものと考えられる。また今回調査した古屋敷や、隣接する東久保、かに原等の遺跡についても、表面採集の段階では、その主体となる遺物は、縄文中期中葉のものであり、曽利期に降るものは僅かであった。また従来、櫛形町内の特に市之瀬台地を中心とする地域は縄文時代中期の遺跡が数多く認められたところである。過去における調査[13]においても、縄文中期中葉の集落（遺構）が検出されてきたが、縄文中期、曽利期まで降ると、遺構の発見例は極端に少なくなり、土壙数例が確認されてきたにすぎない。

従って、今回の調査は、市之瀬台地を中心とする甲府盆地西縁にあっても、縄文時代中期後葉まで集落が存在し続けたことをあらためて明確にするものであった。古屋敷遺跡やかに原遺跡における遺物の散布状態などから考えると、縄文中期中葉の遺構群とは微妙にずれた位置に遺構が占地していることも考えられ、逆に縄文中期中葉から後葉への遺跡の占地規模、内容の変化の一端を示すものといえよう。

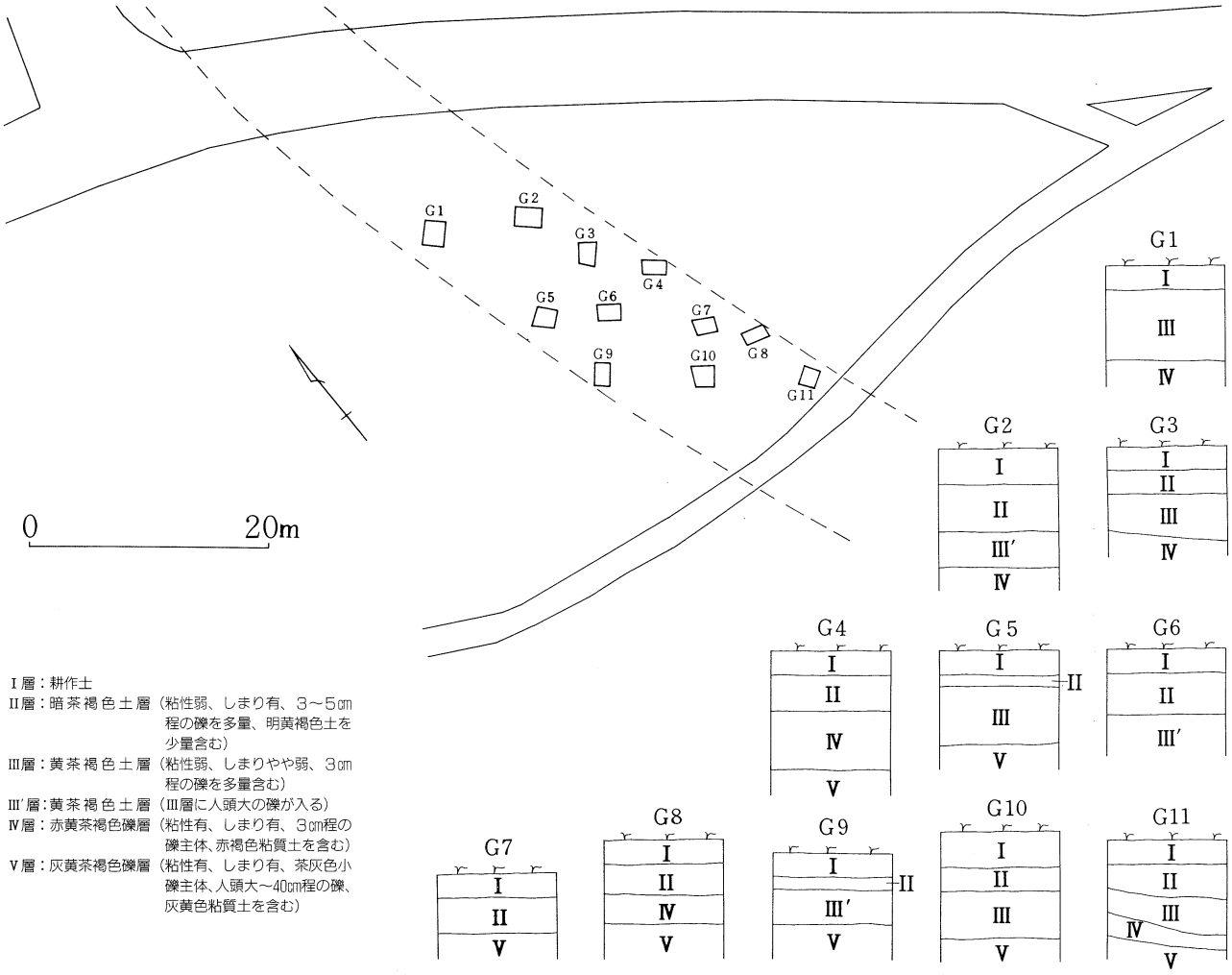
第Ⅴ章　西畑Ｆ遺跡の調査

古屋敷遺跡の調査がほぼ完了した10月12日から試掘調査に入った。この遺跡は巾10～20ｍ程の台地先端にあたり、今回のⅠ区に入る範囲は巾14ｍ、長20ｍ程であった。また地形的にも北へ向っての傾斜面でもあったため、11箇所の試掘グリットを設け、地中の状態を観察し、遺構、遺物が発見された場合、本格的な調査に入ることとした。

グリットは基本的に２×２ｍであるが、果物が植えられていたため、その配置はやや不規則である。掘削は、すべて人力によって行った。

耕作土下は、指頭大の礫を多量に含んだ層（Ⅱ・Ⅲ層）となり、更にその下部は、赤変した非常にもろい礫でいわゆる「くされ礫」と呼ばれる人頭大の礫が混入した含礫層となっている。このⅤ層は、上野山礫層と呼ばれる「くされ礫」や灰黄色、赤灰色の粘質土を含む礫層で、古い洪積世扇状地堆積物である。この上部に火山性堆積物（ローム）がのり、それを切りこんで遺構が営まれるものである。しかしここでは、Ⅱ層に混入する僅かな明黄褐色土（ローム粒）を除くと、それらの火山性堆積物を確認することが出来ず、従って遺構、遺物も全く発見出来なかった。

おそらく何らかの自然的条件によって、火山性堆積物が流失した後に、ローム粒を含んだ含礫層（Ⅱ・Ⅲ層）が堆積したものと考えられる。



第18図　西畑Ｆ遺跡試掘グリット配置図及び土層断面概念図〔1/600、1/60〕

引用・参考文献

註１　山梨県埋蔵文化財センターは、昭和63年～平成３年にかけて平岡地内における本広域農道路線内において長田口遺跡等の発掘調査を行い、弥生時代末の集落、中世の地下式横穴等の遺構を検出している。

２　櫛形町教育委員会1990　櫛形町文化財調査報告№８『町内遺跡詳細分布調査報告書』

３　山梨県埋蔵文化財センター1994　村前東遺跡見学会資料

４　櫛形町教育委員会1985　櫛形町文化財調査報告№２『上の山遺跡』

５　櫛形町教育委員会1985　櫛形町文化財調査報告№３『六科丘遺跡』

６　甲西町教育委員会1986　『上ノ東遺跡』

７　櫛形町教育委員会1984　櫛形町文化財調査報告№１『曽根遺跡』

８　物見塚古墳環境整備調査委員会1982　『物見塚』櫛形町教育委員会

９　註５に同

10　吉岡弘樹1987　「甲西町上ノ東古墳地形測量調査の概要」『山梨県考古学協会誌』創刊号　山梨県考古学協会

11　甲西町誌編纂委員会1973　『甲西町誌』　甲西町教育委員会

12　小笠原長清公資料検討委員会1991　『小笠原長清公資料集』　櫛形町

13　註４、５に同

『櫛形山の自然』編纂委員会1976　『櫛形山の自然』　山梨県県立巨摩高等学校

櫛形町誌編纂委員会1966　『櫛形町誌』　櫛形町教育委員会

報　告　書　抄　録

ふりがな	ふるやしきいせき		
書　　名	古屋敷遺跡		
副 書 名	広域農道富士川西部地区櫛形６工区にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書		
シリーズ名	櫛形町文化財調査報告	シリーズ番号	No. １４
編著者名	清　水　　博		
発 行 者	櫛形町教育委員会		
編集機関	櫛形町教育委員会		
所 在 地	〒400－03　　山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原397－1　　TEL 0552－82－0108		
発行年月日	1994年10月31日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
ふるやしき 古屋敷遺跡	やまなしけんなかこまぐん 山梨県中巨摩郡 くしがたちょうなかの 櫛形町中野	193909		35度 35分 41秒	138度 26分 37秒	19930806 ～ 19931008	2000	広域農道富士川西部地区櫛形６工区開設に伴う調査
にしはた 西畑Ｆ遺跡	やまなしけんなかこまぐん 山梨県中巨摩郡 くしがたちょううえの 櫛形町上野	193909		35度 35分 55秒	138度 26分 35秒	19931012 ～ 19931015	44	

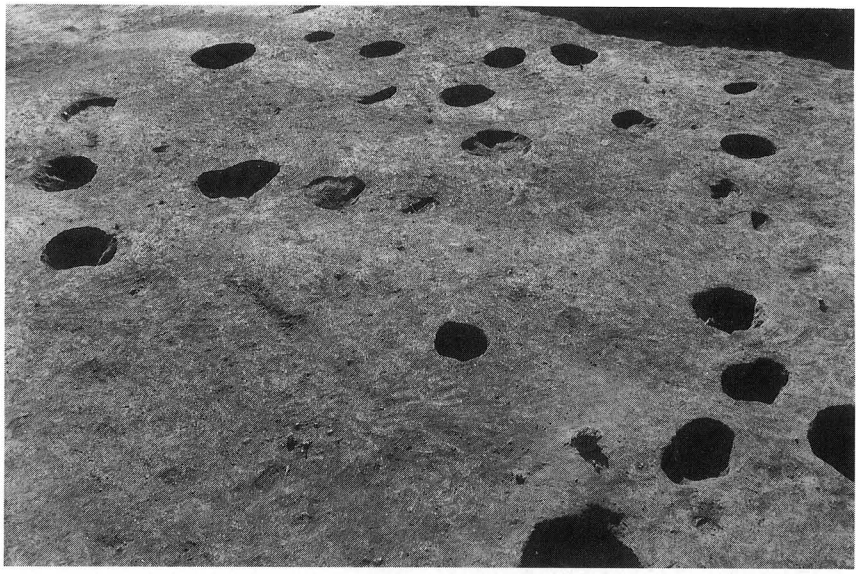
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ふるやしき 古屋敷遺跡	集落	縄文時代 中期後葉	住居址、土壙、ピット群 溝状遺構	縄文土器、 水晶製石器、同原石	

古屋敷遺跡遠景

II区（１号溝状遺構・土壙群）

II区土壙群
（１～４号・６号・12号・18号・
24号・40号土壙）

1号住居址



2号住居址

III区土壙群

櫛形町文化財調査報告　No.14

古屋敷遺跡

平成６年10月31日　発行

編集　櫛形町教育委員会
発行　山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原
印刷　（株）山扇印刷
山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原